

理学療法学科 夜間部			令和2年度改定新カリキュラム							
ページ		講師	1年		2年		3年		4年	
			単位	時間	単位	時間	単位	時間	単位	時間
90	心理学	小野寺 哲夫	1	15						
91	導入演習	高橋 豊	2	30						
92	人間関係学	川村 啓輔	2	30						
93	情報科学	篠田 良平	2	30						
94	基礎演習	木下 修・高橋 豊	2	30						
95	保健体育	小平 健太郎	2	30						
96	英語	黒木 豊域	1	15						
97	解剖学Ⅰ	春原 正隆	1	30						
98	解剖学Ⅱ	春原 正隆	1	30						
99	解剖学Ⅲ	春原 正隆	1	30						
100	機能解剖学Ⅰ	畠山・石垣・村井	1	30						
101	機能解剖学Ⅱ	畠山・石垣・村井	1	30						
102	生理学Ⅰ	越智 広樹	1	30						
103	生理学Ⅱ	越智 広樹	1	30						
104	生理学Ⅲ	小平 健太郎	1	30						
105	生理学実習	渡辺 信博	1	30						
106	運動学Ⅰ	臼杵 寛	1	30						
107	運動学Ⅱ	臼杵 寛	1	30						
108	人間発達学	黒木 光	1	30						
109	リハビリテーション医学概論Ⅰ	草野 修輔	2	30						
110	理学療法概論Ⅰ	高林 礼子	2	30						
111	病態運動学	鈴木 雅男	1	15						
112	総合演習Ⅰ	高橋 豊	1	30						
113	検査測定法Ⅰ	高橋 豊・木下 修	1	30						
114	検査測定法Ⅱ	高橋 豊・吉葉 則和	1	30						
115	運動療法学Ⅰ	篠田 良平	1	30						
116	臨床見学実習Ⅰ	PT学科教員	1	45						
117	自然科学	野村 崇			2	30				
118	運動学実習	篠田 良平			1	45				
119	病理学概論	何 聰(カ ソウ)			2	30				
120	臨床心理学	小野寺 哲夫			2	30				
121	内科学・老年学Ⅰ	本間 博			2	30				
122	内科学・老年学Ⅱ	本間 博			2	30				
123	整形外科学Ⅰ	星野 雄一			2	30				
124	整形外科学Ⅱ	星野 雄一			2	30				
125	神経内科学	斎藤 史明・真先 敏弘			2	30				
126	精神医学	河邊 宗知			2	30				
127	小児科学	江添 隆範			1	15				
128	リハビリテーション医学概論Ⅱ	高瀬 慎輔・石川 秀志			2	30				
129	理学療法研究法	高林 礼子			1	15				

130	検査測定法Ⅲ	鈴木 雅男・畠山 敦			1	30				
131	検査測定法Ⅳ	内山 結城・畠山 敦			1	30				
132	検査測定法演習Ⅰ	吉葉・下村・高橋			1	30				
133	検査測定法演習Ⅱ	畠山・鈴木・内山			1	30				
134	総合演習Ⅱ	鈴木 雅男・畠山 敦			1	30				
135	運動療法学Ⅱ	畠山 敦・村井 敦士			1	30				
136	物理療法学	篠田 良平			1	15				
137	日常生活活動学Ⅰ	篠田 良平			1	30				
138	疾患別理学療法Ⅰ-A	米村 豊			1	30				
139	疾患別理学療法Ⅲ-B	篠田 良平・鈴木 雅男			1	30				
140	理学療法技術論Ⅲ	畠山 敦・村井 敦士			1	30				
141	理学療法技術論Ⅳ	水口 健一			1	30				
142	臨床見学実習Ⅱ	PT学科教員			1	45				
143	臨床検査測定実習	PT学科教員			1	45				
144	医学倫理	千田 佳遠里					1	15		
145	解剖学Ⅳ	PT学科教員					1	15		
146	専門基礎医学演習Ⅰ	PT学科教員					2	30		
147	理学療法管理学	臼杵 寛・下村 周平					2	30		
148	義肢装具学	木下 修・石垣 栄司					1	30		
149	日常生活活動学Ⅱ	篠田 良平					1	30		
150	疾患別理学療法Ⅰ-B	米村 豊					1	30		
151	疾患別理学療法Ⅱ-A	鈴木 雅男					1	30		
152	疾患別理学療法Ⅱ-B	鈴木 雅男					1	15		
153	疾患別理学療法Ⅲ-A	鈴木 雅男					1	30		
154	疾患別理学療法Ⅳ-A	塩澤 和人					1	30		
155	疾患別理学療法Ⅳ-B	高瀬 慎輔					1	30		
156	疾患別理学療法Ⅴ	山本 紘靖					1	30		
157	理学療法技術論Ⅰ	鈴木 章規					1	30		
158	理学療法技術論Ⅱ	黒木 光 他					1	30		
159	理学療法技術論Ⅴ	鈴木 雅男					1	30		
160	総合演習Ⅲ	PT学科教員					1	30		
161	地域理学療法学	下村 周平					2	30		
162	生活環境学	下村 周平					2	30		
163	臨床実習Ⅰ	PT学科教員					8	360		
164	専門基礎医学演習Ⅱ	PT学科教員							2	30
165	理学療法特論Ⅰ	PT学科教員							2	60
166	理学療法特論Ⅱ	PT学科教員							2	60
167	理学療法特論Ⅲ	PT学科教員							2	60
168	理学療法特論Ⅳ	PT学科教員							2	60
169	臨床実習Ⅱ	PT学科教員							16	720
			34	780	37	810	31	885	26	990

		理学療法学科	夜 間 部
科 目	心理学	単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	小野寺 哲夫	学 年	1年生
実績経験	資格	神奈川県藤沢市教育委員会学校教育課所属学校訪問相談員として4年間、文科省認定スクールカウンセラーとして、神奈川県海老名市（8年）、大和市（3年）、鎌倉市（3年）の小中学校にて、児童生徒、保護者、教員の相談、およびカウンセリング、管理職に対するコンサルテーション等に従事してきた。2020年には国家資格公認心理師を取得。これらの実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。	
	公認心理師・臨床心理士 Ph. D		

授業の位置づけ	心理学は、全ての医療専門職の基礎となる学問のひとつである。心理学では、科学としての現代心理学が、誕生以来この100年間、どのようなことを研究してきて、どんなことが明らかになってきたのかなどについて、有名な心理学実験なども紹介しながら心理学の面白さや魅力が伝わるような解説を行う。また、この授業は、講師による一方通行的な講義だけでなく、できる限り貴重な映像を観たり、心理テストを行ったり、お互いにディスカッションしたりしながら、アクティブラーニングの視点に立った参加型の授業を展開していく。また、OT/PTの国家試験を見据えて、高頻度で出題される分野を手厚く授業していく予定である。		
到達目標	P Tの国家試験を見すえながら、心理学の基礎知識を理解する。心理学の全体像を理解し、さらに人間の発達段階における特徴や人間理解の基礎的知識を習得する。		
授業形態	講義・演習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	心理学研究法と歴史	心理学とは何か？ 心理学研究法と心理学の4つのパラダイムについて
2回	知覚心理学①	精神物理学の基本と奥行き知覚、運動知覚、反転図形など
3回	知覚心理学②	ゲシュタルトの法則と注意のメカニズム、錯視図形など
4回	学習心理学①	古典的条件づけ ワトソンの恐怖条件づけ ガルシアの味覚嫌悪学習
5回	学習心理学②	オペラント条件づけ シェイピング 強化の原理
6回	学習心理学③	社会的学習理論と行動療法 発達心理学（ピアジェ、フロイト、エリクソン）
7回	記憶心理学①	短期記憶（ワーキングメモリ）、長期記憶、展望記憶、プライミング、忘却説
8回	記憶心理学②	神経心理学における記憶過程（即時記憶、近時記憶、遠隔記憶、）、記憶障害

成績評価	期末レポート課題（90％）、 毎回のミニレポート課題（10％）で評価する。	受講上のルール・留意点	毎回のミニレポート課題は、授業で学んだ内容について、感想や自分の意見、質問等を比較的自由に書いて提出する。 毎回の授業と試験において、教科書は必ず使用する。
------	--	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
原則としては、毎回のミニレポート課題についてのフィードバックは行われませんが、必要に応じて行う場合もある。

	書名	著書名	出版社名
教科書	P T・O Tのための心理学テキスト	小野寺哲夫	JFAパブリッシング
参考書	はじめてまなぶ行動療法	三田村仰	金剛出版
オフィスアワー	「授業前後の休憩時間」		

理学療法学科 夜間部			
科 目	導入演習	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	高橋 豊	学 年	1年生 前期
実績経験	資格	高橋：実務経験12年 介護老人保健施設・訪問リハビリテーション・デイケア・デイサービスにて勤務。実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	理学療法士の働く臨床現場では、他職種(医師・看護師・作業療法士・言語聴覚士・ソーシャルワーカー・ケアマネジャー・医療事務・管理栄養士・薬剤師・介護福祉士・社会福祉士・看護助手など)との連携が欠かせない。それぞれの職種が患者や利用者様の治療目標・介護目標等に向かって仕事をしている。それぞれの専門家が協働することでチーム力が高まり目標が達成できるため、お互いの仕事の進み方などを知る必要がある。 まず自分のことを知り、できる範囲で自分を開示し、相手の立場や思いを尊重する態度を養う。前期から専門基礎を学び、同時期にグループワークを通して、合意形成する過程を経てチームで連携することを学ぶ。また合意形成した内容からグループで発表することも学ぶ。 実習に向けて学び、臨床現場で理学療法士がどのように働いているのか意識できるように、様々なグループワークを通して多角的な視点(他者の視点)や思いがあることに気づける態度を養う。		
到達目標	1. 提出期限を守り提出物を提出できる。 2. グループワークを通して思考・創造し、記述・口述できる。		
授業形態	講義・実習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	オリエンテーション(授業・実習等)
2回		学校生活および自宅での時間の使い方
3回	自尊心/時間の使い方	自尊心・患者の時間・理学療法士の時間
4回		自分の時間・スケジュール管理・スマホの使い方
5回	自分を知ること 相手を知ること	自分を伝えること(自己紹介)
6回		相手から聴き出すこと(病歴聴取)
7回	考えをまとめること (1)学習の一手段	解剖学グループワーク
8回		生理学グループワーク
9回	考えをまとめること (2)学習の一手段	解剖学グループワーク
10回		生理学グループワーク
11回	考えをまとめること (3)学習の一手段	解剖学グループワーク
12回		生理学グループワーク
13回	チームで協力する力	解剖学グループワーク(発表)
14回		生理学グループワーク(発表)
15回	まとめ	専門基礎総復習

成績評価	授業内提出物100%	受講上のルール・留意点	1. 提出期限が守れないと減点となる。 2. グループワーク中心に講義を行う。全メンバーが一人一人の意見を尊重する態度を求める。 3. それぞれの発表までの積極的なグループへの貢献、積極的な発言を求める。
------	------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
グループワーク中は、机間巡回中に行う。またリフレクションシートには、質問欄を設けているので、その記載に合わせてフィードバックを行う。疑問・質問に関しては、メールで随時対応、時間外にも対応する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	配布資料		
オフィスアワー	高橋：授業前後及びメール（y-takahashi@nichireha.ac.jp）		

理学療法学科		夜間部	
科 目	人間関係学	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	川村 啓輔	学 年	1年生 前期
実績経験	臨床心理士・公認心理師	臨床心理士・公認心理師として、教育相談、スクールカウンセラー、私設心理相談室などで、子どもから大人まで様々な年齢層のクライアントとカウンセリングをしてきました。イメージを使った心理療法（夢分析、箱庭療法、描画法など）やプレイセラピーに関心があり、研究を続けています。実務の中で経験した事例にも触れながら講義を行います。	

授業の位置づけ	対人援助職を志すみなさんにとって、人間関係やコミュニケーションに関する知識をつけることは必須です。この講義では、人間関係やコミュニケーションにおける基礎的な部分を扱います。はじめに、人間関係やコミュニケーションについての講義を行います。その中に、講師の自験例や参考書の事例などを織り交ぜていきます。その内容をもとにディスカッションをし、様々な視点から事例を捉える体験をしていただきたいと思います。また、人を相手にする職業は、相手だけでなく、同時に自分自身に向き合う必要があります。ですので、模擬的な心理検査を行ったり、ロールプレイをしたりしながら、自分自身の内面や相手を知るという機会にしていきたいと思っています。		
到達目標	臨床現場で必要とされる最も基礎的な能力は人間関係を築く力です。そのためには、人間関係やコミュニケーションに関する知識を身につけることが大切です。また、それと同時に、自分自身を知ることや他者を知ろうとすることも大切なことです。この講義では、これらのことを心がける上で必要な知識の習得を目指します。対人援助職としても、また、一人の“人”としても、他者の視点を持って、人と関わるといことは大切なことです。このような、コミュニケーションの“核”となるものを身につけることを目標とします。		
授業形態	講義		

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	講義内容・進め方の確認
2回	話を“聴く”こと	対人援助職とは，感情労働，バーンアウト
3回	“私”とは	心の構造や発達理論的に見た“私”について解説します。エゴグラムの実施（レ）
4回	私と私ではないもの	“私”と“私”ではないものについて，臨床心理学的に解説します。
5回	コミュニケーション①	コミュニケーションについて，カウンセリングの技法。
6回	心理検査の体験① 人は何をどう見ているのか	心理検査を用いて，“共感すること”を実践的に学びます（レ）。
7回	コミュニケーション②	コミュニケーションの中で使っているスキルについて解説します。
8回	イメージを使った交流	心理療法場面で使う描画法を通して，イメージを使った交流を体験します（レ）。
9回	コミュニケーション③	臨床場面でのコミュニケーションで留意すべき点について，臨床心理学的な観点も踏まえて解説します。
10回	心理検査の体験② 自分の心の中を表現する	描画テストを用いて，自分の内界について考えていきます（レ）。
11回	身体と心とイメージ	心と身体の繋がりについてレクチャーします。
12回	見立てと発達理論	心の発達についてレクチャーした上で，臨床心理学的な見立て（アセスメント）について解説します。
13回	子どもの臨床・大人の臨床	主に精神疾患や発達障害について取り上げます。
14回	事例検討	教科書に載っている事例を使いディスカッションをします。
15回	まとめ	全体のまとめ，学期末レポートについて

成績評価	レポートの提出	受講上のルール・留意点	授業の中で何度かレポート課題を出します（現段階ではシラバスに表記されている（レ）の回で予定）。さらに，学期末の試験として，もう1回レポート課題を出します。計5回のレポート提出によって，成績の評価をします。 ※下記の参考書『看護のための精神医学』は必要な回にコピーして配布するので，購入しなくて良いです。
------	---------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
レポートは紙媒体で提出してください。講義の中で何度か感想を提出していただく場面がありますので，その際に疑問点や質問があれば，書いてください。その次の講義でお答えします。または，講師のメールアドレスを教えますのでメールでも良いです。もちろん，授業の前後の時間で直接お声掛けいただいても構いません。

	書名	著書名	出版社名
教科書	PT・OTのためのコミュニケーション実践ガイド	山口美和	医学書院
参考書	看護のための精神医学	中井久夫・山口直彦	医学書院
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科 目	情報科学		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	篠田 良平		学 年	1年生 前期
実績経験	資格	実務経験 30年 理学療法士として、回復期病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市や区の心身障害者福祉センター・通所センター・保健センターとクリニックにて勤務歴があり、実務経験を活かし実例を交えながら講義を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	現代生活に於いて欠かせない事項となった情報操作について学ぶ。最もシンプルな情報の扱いとして聞き取りやメモの取り方から始まり、パソコンを使用したオフィス系プログラムの応用的な使い方を学習する。今後の学生生活でレジュメやレポートの提出、グループワークの結果のプレゼンテーション等、頻繁にパソコンを使用した課題が要求されるのでよく使われる機能を覚える。 授業方法は、プリントとパワーポイントを用いた解説から始まり、実際にパソコンを操作して課題を作成する。パワーポイントの課題で作成した資料を基にグループのメンバー相手に一人でプレゼンテーションを行う。		
到達目標	○情報の概念を再考する。 ○今後必要なOfficeの使用方法を覚える。 ○個別に複数人相手のプレゼンテーションを体験する。		
授業形態	講義・演習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	情報の概念	情報の概念 メモとまとめ
2回	情報の概念	ジャーナル・論文の検索
3回	Word授業	文書入力、記号入力
4回	Word演習	文書要約とレイアウト
5回	Word演習	症例レポートの作成
6回	Excel授業	家屋図、家系図の作成
7回	Excel演習	時間割の作成
8回	Excel演習	時間割の作成
9回	Powerpoint授業	スライドによる表現方法、見やすい資料
10回	Powerpoint演習	発表課題の作成
11回	Powerpoint演習	プレゼンテーション（グループ）
12回	Powerpoint演習	プレゼンテーション（グループ）
13回	Office演習	症例情報レジュメの作成
14回	Office演習	症例情報レジュメの作成
15回	画像処理	画像処理プログラムの使い方

成績評価	授業中に作成した課題をUSBメモリに保存して提出：100%	受講上のルール・留意点	使用方法に慣れるため、基本的には自分のパソコンを持参。WindowsのOfficeプログラムを前提として授業を進める。類似ソフトやMAC系Officeでは機能的に足りない場合や互換性に問題が生じる場合がある。
------	-------------------------------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
演習中に各席を回りながら指導

	書名	著書名	出版社名
教科書	無し		
参考書	無し		
オフィスアワー	担当授業の前後		

理学療法学科 夜間部			
科 目	基礎演習	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	木下 修・高橋 豊	学 年	1年生 後期
実績経験	資格	高橋：実務経験11年 介護老人保健施設・訪問リハビリテーション・デイケア・デイサービスにて勤務。実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。 木下：義肢装具士として43年、製作・適合判定に従事していました。 理学療法士として33年、総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・在宅訪問・ディサービス・保健所・教育機関は大学・大学院などに従事していました。	
	理学療法士 義肢装具士		

授業の位置づけ	学生は1年前期から解剖学・生理学・運動学といった専門基礎を学び、後期から検査測定法や運動療法学を学んでいく。2年次は、専門基礎知識を基盤に疾患学や他の検査測定法、疾患別理学療法を学んでいく。そのため専門知識の理解が必須である。 この授業ではグループワークを通して専門基礎などの医学用語や知識の理解をさらに深める。現在の臨床現場ではチーム医療・他職種連携が必須であり、当然同職種とも連携や報告・連絡・相談が必要である。グループメンバーを尊重しながら相手の意見の傾聴、自分の意見の伝達、共同作業などを演習し、必須スキルを高めていく。 この授業の後半には学んだ検査測定法を用いて、一部理学療法実技を行う。前後にアルコール消毒や身だしなみを整え、臨床現場に即した演習とする。		
到達目標	1. 2年次に学ぶ疾患学・治療学に繋がるよう解剖学・生理学・運動学の理解を深めることができる。 2. 学んだ検査測定法を用いて治療演習を実施できる。 3. 治療の効果について検査を行い、記録することができる。		
授業形態	演習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	専門基礎(1)	理学療法士の専門基礎に必要なとなる知識の総括
2回	専門基礎(2)	解剖学グループワーク・演習
3回	専門基礎(3)	
4回	専門基礎(4)	
5回	専門基礎(5)	
6回	専門基礎(6)	
7回	専門基礎(7)	生理学Ⅱグループワーク・演習
8回	専門基礎(8)	
9回	専門基礎(9)	
10回	専門基礎(10)	
11回	人間発達学	人間発達学グループワーク
12回	機能解剖学	機能解剖学グループワーク
13回	検査測定法	ROM・四肢周径・MMT・検査・運動療法演習
14回	検査測定法	
15回	検査・運動療法	

成績評価	授業内課題・提出物・小テストで評価します	受講上のルール・留意点	1.毎回目フレクションシートを記載、期限内に提出すること。 2. 実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。その際に臨床業務に影響のある身だしなみはしないこと(アクセサリを外す、長い髪は束ねる等、その他必要に応じてアルコール消毒するなど感染予防に努めること)。
------	----------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
実技演習に関しては、机間巡回中に行う。またリフレクションシートには、質問欄を設けているので、その記載に合わせてフィードバックを行う。疑問・質問に関しては、メールで随時対応、時間外にも対応する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	解剖学・運動学・生理学・理学療法評価の教科書		
	配布資料		
オフィスアワー	高橋:授業前後及びメール(y-takahashi@nichireha.ac.jp) 木下:授業前後及びメール(o-kinoshita@nichireha.ac.jp)		

理学療法学科						夜 間 部	
科 目		保健体育		単位・時間数		2単位・ 30時間	
担当講師		小平 健太郎		学 年		1年生 後期	
実績経験		資 格	運動と健康に関わる現実的課題に対して、これまでトレーニングコーチとして運動選手から一般の方への運動指導経験を講義に反映して展開する。保健医療（理学療法・作業療法、看護、臨書検査、鍼灸理療、柔道整復 等）部門で生理学授業を担当している教員が医療従事者に必須な生体機能の調節機構について日常生活からの視点を例示しながら講義を実施する。				
		NSCA-CSCS, NSCA-CPT, 体育学修士					
授業の位置づけ		運動の重要性は近年特に叫ばれているが、方法によっては逆効果にもなるリスクも潜んでいるため対象者に合わせた適切な方法を経験則だけでなく知見として習得していくことが専門職としても求められる。また、自身の動作での課題の発見や適した改善を図ることは自身の健康を保つためにも必要である。 講義における基礎知識の習得だけでなく演習やグループディスカッションを通じて、多方面から運動や動作について考える時間を設ける。					
到達目標		①動作改善演習を通じて改善のための選択手段を説明できる。 ②感覚に制限がある場合の運動感覚、運動指導について体験を通して説明できる。 ③様々なトレーニングの方法、コンディションを維持する方法について説明できる ④障がい者スポーツの起源や内容について理解する ⑤体育・スポーツに関連する課題を説明できる					
授業形態		講義・演習		対面と遠隔の併用授業			

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	運動の有効性	運動・スポーツが生活にもたらす効果
2回	運動のリスク	運動に伴うリスク
3回	体力測定①	自身の体力レベルをチェックする、ロコモテストの実践
4回	体力測定②	年代別の体力測定種目の違い
5回	動作改善演習①	柔軟性・可動性改善演習①
6回	動作改善演習②	柔軟性・可動性改善演習②：①を踏まえてのグループワーク
7回	障がい者スポーツ①	障がい者スポーツの歴史、競技の理解
8回	障がい者スポーツ②	障がい者スポーツの疑似体験
9回	動作改善演習③	トレーニングフォーム、動作改善演習①:自体重での運動
10回	動作改善演習④	トレーニングフォーム、動作改善演習②：①を踏まえてのグループワーク
11回	睡眠、嗜好品	睡眠のメカニズム、嗜好品が心身に与える影響
12回	スポーツ科学の応用	スポーツ科学分野での知見の応用（映像学習）
13回	様々なスポーツの形	レクリエーションスポーツ・ゆるスポーツ
14回	行動変容	運動・スポーツ参加を促すための行動変容
15回	総合演習	運動が身体にもたらす影響についてのまとめ

成績評価	レポート試験：70%、講義内課題30%の合計100%で評価する。 授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。	受講上のルール・留意点	講義を踏まえて運動が身体にもたらす影響について総合的に考察したものを課題として出題する。 講義内では授業課題に沿った課題を出題する。
------	---	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
FBは全体に対して実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	百寿時代の運動・スポーツのトリセツ ー日本臨床スポーツ医学会からの提案ー	日本臨床スポーツ医学会学術委員会	有限会社ナッ プ
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科 目	英語	単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	黒木 豊域	学 年	1年生 後期
実績経験	資格	米国ユタ州プロボ市ワサチ・メンタルヘルスセンターでのセラピストの経験をもとに、クライアントと英語での対話の訓練を行ないます。	
授業の位置づけ	グローバル化するわが国において、外国人観光客・在留外国人は年々増加傾向にある。これに伴い、PT・OTが外国人患者への支援行う機会の増大が見込まれている。この科目では、PT・OTが、英語にて患者に接し、医療用語を用いてリハビリ現場で会話ができるようになることを目指す。すなわち、最初の接遇からはじまり、問診、説明、肢位の指示などの特定の状況における会話を英語でできるようになるために、ロールプレイ演習を行う。中学や高等学校教育の英語と異なり、会話する英語の習得を目標とし、毎回の授業は声を出して話すことに焦点が当てられている。また、人体や施術に関わる英語の専門用語を習得することも目標としている。		
到達目標	1．人体に関してや一般的な医療用語の英単語を覚え活用することができる 2．支援現場において用いることのできるフレーズを活用できる 3．支援現場における英会話を構成し、活用できる。		
授業形態	講義・演習	併用授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	Introduction・問診 1・2	シラバスの説明、 ロールプレイ：笑顔と挨拶、痛む場所と程度
2回	問診 3	ロールプレイ：痛みの経過を聞いてみよう 単語テスト 1
3回	肢位設定	ロールプレイ：基本的な肢位を指示してみよう 単語テスト 2
4回	評価 1・2	ロールプレイ：バイタルサインを確認しよう 単語テスト 3
5回	評価 3	ロールプレイ：筋力を測定してみよう 単語テスト 4
6回	治療	ロールプレイ：ホームエクササイズの指導 単語テスト 5
7回	Long Play	試験のためのロールプレイの計画
8回	試験	単語試験とLong Play試験

成績評価	ロールプレイ 30 単語テスト 25 定期試験 単語 25 Long Play 20 総合 100%から学校の評価規 準に準じて成績評価とする。	受講上のルール・留意点	・英単語を覚える ・表情豊かに大きな声で、ジェスチャー等の動きを含めて発表する
------	---	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
ロールプレイは、ペアごとにの発表を評価票を用いて評価する。フィードバックは発表終了後に行なう。

	書名	著書名	出版社名
教科書	授業資料を配布		
参考書	PT・OTが書いたリハビリテーション英会話	三木貴弘ほか	MEDICAL VIEW
オフィスアワー	授業終了後		

理学療法学科 夜間部			
科 目	解剖学Ⅰ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	春原 正隆	学 年	1年生 前期
実績経験	資格	大学では科目責任者として、人体解剖学の講義・実習を担当しております。座学で学んだ知識を、人体解剖学実習見学を通して三次元的に理解し、将来の臨床に是非とも役立てて頂きたいと考えております。	
	歯科医師・博士（医学）		

授業の位置づけ	理学療法士に必要な解剖学的基礎知識を修得するため、人体を構成する諸器官を系統別に認識し、人体各部位の骨格および関節・靱帯を3次的に理解する。		
到達目標	1) 基礎医学の最重要科目である解剖学の定義や目的を説明できる。 2) 人体の構成要素および発生の仕組みについて説明できる。 3) 運動器系を構成する人体各部位の骨の名称および関節の構成や形態的特徴および働きを説明できる。		
授業形態	講義		

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	解剖学総論	解剖学とは（定義・目的），解剖学用語，人体の区分，人体の腔所（p. 3～8）
2回	人体の構成	細胞，組織，器官・器官系・個体（p. 9～20）
3回	人体の発生①	胚子の発生，器官系の発生①（p. 21～34）
4回	人体の発生②	器官系の発生②，胎児の発生，出生後（p. 24～36）
5回	骨格総論	骨の形態，骨の構造，骨の血管と神経，骨の機能，骨の発生，骨のモデリング（p. 37～45）
6回	骨格各論①	頭蓋骨（p. 46～57）
7回	骨格各論②	脊柱，胸郭（p. 58～67）
8回	骨格各論③	上肢の骨（p. 68～77）
9回	骨格各論④	下肢の骨（p. 78～92）
10回	関節靱帯総論	骨の連結，関節の構造と機能（p. 97～112）
11回	関節靱帯各論①	頭蓋の連結，脊柱，脊柱と頭蓋および胸郭の連結（p. 113～122）
12回	関節靱帯各論②	上肢の連結①（p. 123～136）
13回	関節靱帯各論③	上肢の連結②（p. 123～136）
14回	関節靱帯各論④	下肢の連結①（p. 137～154）
15回	関節靱帯各論⑤	下肢の連結②（p. 137～154）

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には単位を認定しない
------	------	-------------	-------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学・作業療法学 解剖学	奈良 勲 / 鎌倉 矩子	医学書院
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

		理学療法学科	夜 間 部
科 目	解剖学Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	春原 正隆	学 年	1年生 前期
実績経験	資格	大学では科目責任者として人体解剖学の講義・実習を担当しております。座学で学んだ知識を、人体解剖学実習見学を通して三次元的に理解し、将来の臨床に是非とも役立てて頂きたいと考えております。	
	歯科医師・博士（医学）		

授業の位置づけ	理学療法士に必要な解剖学的知識を修得するため，人体を構成する諸器官を系統別に認識して，人体各部の筋系および神経系を中心に講義を通して理解する。		
到達目標	1) 生体を構成する各筋の名称を列挙し、筋の形態的特徴、起始・停止および作用を説明できる。 2) 神経系の構成および中枢・末梢神経の区分が説明できる。 3) 脳・脊髄の形態的特徴や働きが説明できる。 4) 各脳神経の名称、構造、分布、働きおよび特徴について説明できる。		
授業形態	講義		

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	筋系総論①	筋組織の種類と特徴，骨格筋の構造（p. 161～170）
2回	筋系総論②	骨格筋の作用，骨格筋の神経支配（p. 171～176）
3回	筋系各論①	体幹の筋①（p. 177～195）
4回	筋系各論②	体幹の筋②（p. 177～195）
5回	筋系各論③	上肢の筋①（p. 196～210）
6回	筋系各論④	上肢の筋②（p. 196～210）
7回	筋系各論⑤	下肢の筋①（p. 211～227）
8回	筋系各論⑥	下肢の筋②（p. 211～227）
9回	神経系総論①	神経系の区分，神経系の構成（p. 229～234）
10回	神経系総論②	髄膜と脳室系，神経系の発生（p. 235～240）
11回	中枢神経系①	脊髄，脳幹①（p. 241～251）
12回	中枢神経系②	脳幹②，小脳（p. 245～255）
13回	中枢神経系③	大脳（p. 256～267）
14回	末梢神経系①	脳神経①（p. 300～310）
15回	末梢神経系②	脳神経②，自律神経系（p. 300～314）

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には単位を認定しない
------	------	-------------	-------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学・作業療法学 解剖学		医学書院
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

理学療法学科 夜 間 部			
科 目	解剖学Ⅲ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	春原 正隆	学 年	1年生 後期
実績経験	資格	大学では科目責任者として、人体解剖学の講義・実習を担当しております。座学で学んだ知識を、人体解剖学実習見学を通して三次元的に理解し、将来の臨床に是非とも役立てて頂きたいと考えております。	
	歯科医師・博士（医学）		

授業の位置づけ	理学療法士に必要な解剖学的知識を修得するため、人体を構成する諸器官を系統別に認識して、神経系や感覚器系、内臓器系を中心に講義を通して3次元的に理解する。		
到達目標	1) 脊髄神経の構成および分布，働きについて説明できる。 2) 神経系の主要な伝導路について説明できる。 3) 各種感覚器の種類、形態的特徴および働きについて説明できる。 4) 体循環・肺循環および心臓の基本構造について説明できる。 5) リンパの流路およびリンパ節の構造が説明できる。 6) 消化管と消化腺の区分ができ、各臓器の形態的特徴および働きが説明できる。 7) 呼吸器・泌尿器の構成および内分泌腺・各種ホルモンについて説明できる。		
授業形態			

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	末梢神経系③	脊髄神経①（p. 278～300）
2回	末梢神経系④	脊髄神経②（p. 278～300）
3回	中枢神経系④	神経路（p. 268～277）
4回	感覚器系①	外皮，視覚器（p. 319～326）
5回	感覚器系②	平衡聴覚器，嗅覚器，味覚器（p. 326～330）
6回	循環器系①	血管系①（総論）（p. 335～340）
7回	循環器系②	血管系②（動脈）（p. 341～349）
8回	循環器系③	血管系③（静脈，リンパ系）（p. 350～357）
9回	呼吸器系①	鼻，咽頭，喉頭（p. 360～365）
10回	呼吸器系②	気管と気管支，肺，胸膜と縦隔（p. 366～369）
11回	内臓器系総論 消化器系①	内臓器官の基本構造（p. 333～334） 消化管（口腔，咽頭，食道，胃，小腸，大腸）（p. 370～377）
12回	消化器系②	消化腺（肝臓，胆嚢，膵臓，腹膜）（p. 378～380）
13回	泌尿生殖器系①	泌尿器系（p. 384～389）
14回	泌尿生殖器系②	生殖器系（p. 390～396）
15回	内分泌系	ホルモンと標的器官，内分泌腺の種類（p. 398～404）

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には単位を認定しない
------	------	-------------	-------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学・作業療法学 解剖学		医学書院
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

理学療法学科 夜間部				
科 目	機能解剖学Ⅰ		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	畠山 敦, 石垣 栄司, 村井 敦士		学 年	1年生 前期
実績経験	資格	村井：1992年理学療法士免許取得 経験年数31年。10年病院勤務後、はり灸あん摩マッサージの免許を取得。治療院開業後、2015年から教員勤務。 畠山：1985理学療法士免許取得。主として、病院施設を開設、平成9年、鍼灸資格取得、同年より日本リハビリテーション専門学校勤務となる。 石垣：理学療法士として33年。総合病院・維持期病院・教育機関に勤務。総合病院ではPTとして義肢ソケットの作成、組み立て、アライメント修正などを行ってきた		
	理学療法士 はり師・灸師・あん摩マッサージ指圧師			
授業の位置づけ	・将来、理学療法士として働くうえで、筋骨格を理解する必要性は極めて高いです。2次元でとらえがちな解剖学を、骨指標を基に3次元で捉え、実際に確認していきます。主に体表解剖および筋の起始・停止・走行を確認する。 ・講義は2～3人一組で実技を行う。			
到達目標	・講義を通して筋肉の起始・停止を理解できるようにする。その中で3次元的に筋肉がどのように走向しているかを学んでいく。			
授業形態	講義・実習			

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	総論	触察の方法と注意
2回	肩甲骨の講義・演習	肩甲骨の触察問
3回	小円筋の講義・演習	小円筋の触察とIDストレッチ
4回	棘下筋の講義・演習	棘下筋の触察とIDストレッチ
5回	大円筋の講義・演習	大円筋の触察とIDストレッチ
6回	三角筋の講義・演習	三角筋後部線維の触察とIDストレッチ
7回	上腕三頭筋の講義・演習	上腕三頭筋長頭の触察とIDストレッチ
8回	胸郭の講義・演習	棘突起・肋骨の触察
9回	菱形筋の講義・演習	大・小菱形筋の触察とIDストレッチ
10回	肩甲挙筋の講義・演習	肩甲挙筋の触察とIDストレッチ
11回	僧帽筋の講義・演習	僧帽筋上部線維の触察とIDストレッチ
12回		僧帽筋中・下部線維の触察とIDストレッチ
13回	大胸筋の講義・演習	大胸筋鎖骨部の触察とIDストレッチ
14回	上腕二頭筋の講義・演習	上腕二頭筋の触察とIDストレッチ
15回	前腕筋の講義・演習	前腕筋の触察とIDストレッチ

成績評価	筆記試験・口頭試問100％	受講上のルール・留意点	・講義時間数の1/3以上欠席した者には単位を与えない。 ・講義はジャージ等の動きやすい服装で出席する。 ・デニム、チノパン等で参加した場合は減点とする。 ・また、指輪、ピアス、時計等のアクセサリーをつけていた場合も減点とする（結婚指輪は良い）。
------	---------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック			
フィードバックは全体に実施する。			
	書名	著書名	出版社名
教科書	マイオチューニングアプローチ入門 痛みと麻痺に対する治療的手技	高田 治実	協同医書出版社
	最新カラーリングブック 筋骨格系の解剖学	ジョセフ・E・マスコーノ 高田 治実	産調出版
	IDストレッチング 第2版	鈴木重行（編集）	三輪書店
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

理学療法学科 夜間部			
科 目	機能解剖学Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	畠山 敦, 石垣 栄司, 村井 敦士	学 年	1年生 後期
実績経験	資格	村井：1992年理学療法士免許取得 経験年数31年。10年病院勤務後、はり灸あん摩マッサージの免許を取得。治療院開業後、2015年から教員勤務。 畠山：1985年理学療法士免許取得。主として、病院施設を開設、平成9年、鍼灸資格取得、同年より日本リハビリテーション専門学校勤務となる。 石垣：理学療法士として33年。総合病院・維持期病院・教育機関に勤務。総合病院ではPTとして義肢ソケットの作成、組み立て、アライメント修正などを行ってきた	
	理学療法士 はり師・灸師・あん摩マッサージ指圧師		

授業の位置づけ	・将来、理学療法士として働くうえで、筋骨格を理解する必要性は極めて高いです。2次元でとらえがちな解剖学を、骨指標を基に3次元で捉え、実際に確認していきます。主に体表解剖および筋の起始・停止・走行を確認する。 ・講義は2～3人一組で実技を行う。		
到達目標	講義を通して筋肉の起始・停止を理解できるようにする。その中で3次元的に筋肉がどのように走向しているかを学んでいく。		
授業形態	講義・実習		

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	肩甲骨・骨盤の講義・演習	肩甲骨・骨盤の触察
2回	骨盤・大転子の講義・演習	骨盤・大転子の触察
3回	広背筋の講義・演習	広背筋の触察to
4回	腰方形筋の講義・演習	腰方形筋の触察とIDストレッチ
5回	大殿筋の講義・演習	大殿筋の触察とIDストレッチ
6回	中殿筋の講義・演習	中殿筋の触察とIDストレッチ
7回	梨状筋講義・演習	梨状筋の触察とIDストレッチ
8回	半腱様筋の講義・演習	半腱様筋の触察とIDストレッチ
9回	半膜様筋の講義・演習	半膜様筋の触察とIDストレッチ
10回	大腿二頭筋の講義・演習	大腿二頭筋の触察とIDストレッチ
11回	大腿筋膜張筋の講義・演習	大腿筋膜張筋の触察とIDストレッチ
12回	縫工筋の講義・演習	縫工筋の触察とIDストレッチ
13回	大腿直筋の講義・演習	大腿直筋の触察とIDストレッチ
14回	前脛骨筋講義・演習	前脛骨筋の触察と1Dストレッチ
15回	下腿三頭筋講義・演習	下腿三頭筋の触察とIDストレッチ

成績評価	筆記試験・口頭試問100%	受講上のルール・留意点	・講義時間数の1/3以上欠席した者には単位を与えない。 ・講義はジャージ等の動きやすい服装で出席する。 デニム、チノパン等で参加した場合は減点とする。 また、指輪、ピアス、時計等のアクセサリーをつけていた場合も減点とする（結婚指輪は良い）。
------	---------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	マイオチューニングアプローチ入門 痛みと麻痺に対する治療的手技	高田 治実	協同医書出版社
	最新カラーリングブック 筋骨格系の解剖学	ジョセフ・E・マスコリーノ 高田 治実	産調出版
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

理学療法学科 夜間部			
科 目	生理学 I	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	越智 広樹	学 年	1年生 前期
実績経験	資格	経験年数 教育機関等：10年	
	獣医師		

授業の位置づけ	生理学は人体の機能を理解する学問である。身体各臓器における生理的作用を理解することで、どこにどの程度異常が生じていることがわかるようになる。また、体内の諸器官は単独で働いているわけではなく、相互に密接に関連していることの理解も重要である。そこで本講義では、人体の恒常性を維持するための各臓器の機能について学習する。また、生理学は、作業療法、臨床医学を理解する上で基礎となる科目であるため、実際に臨床で遭遇する病態の内容も踏まえて講義する。		
到達目標	生命維持に必要な恒常性維持機能について説明できる。 血液、循環器系、呼吸器系、消化器系、腎臓など各器官系の生理機能、代謝などについて説明できる。		
授業形態	講義（対面と遠隔の併用授業）		

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	生理学とは	恒常性について
2回	細胞生理	細胞生理について、細胞膜と物質輸送、細胞膜の興奮について
3回	循環と血液 I	体液区分と組成、血液成分について、白血球、血小板の役割について
4回	循環と血液 II	心臓の構造、刺激伝導系について
5回	循環と血液 III	心電図、血管について
6回	呼吸 I	呼吸器系の構造、メカニズムについて
7回	呼吸 II	ガス交換・運搬、呼吸の調節について
8回	消化器系 I	消化器の構造、働きについて
9回	消化器系 II	消化器の調節について
10回	消化器系 III	栄養素、代謝について
11回	排泄 I	泌尿器の構造と機能について
12回	排泄 II	再吸収と分泌、尿生成について
13回	体温	体温の調節機構について
14回	内分泌 I	内分泌腺、下垂体、甲状腺、副腎について
15回	内分泌 II	膵臓、生殖、遺伝について

成績評価	定期試験（筆記） 100%	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。
------	---------------	-------------	-----------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは講義内で全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	生理学 第3版	内田さえ、原田玲子他	医歯薬出版
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

理学療法学科 夜間部			
科 目	生理学Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	越智 広樹	学 年	1年生 後期
実績経験	資格	経験年数 教育機関等：10年	
	獣医師		

授業の位置づけ	生理学は人体の機能を理解する学問である。本講義では、人体の運動機能を構成する神経、筋、感覚器を中心に、その構造と機能を学び、外的刺激に対する人体の反射や反応ならびに運動調節の仕組みについても学習する。また、生理学は、作業療法、臨床医学を理解する上で基礎となる科目であるため、実際に臨床で遭遇する病態の内容も踏まえて講義する。		
到達目標	①神経の構造と機能が説明できる。②筋肉の構造と機能が説明できる。③運動制御の仕組みを説明できる。④感覚器官の構造と機能を説明できる。		
授業形態	講義（対面と遠隔の併用授業）		

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	神経系の基礎 I	ニューロンの構造、静止膜電位と活動電位
2回	神経系の基礎 II	興奮伝導のしくみ
3回	神経系の基礎 III	シナプス伝達のしくみなど
4回	神経系の基礎 IV	神経の可塑性と再生など
5回	中枢神経系	中神経系の分類と機能
6回	末梢神経系	末梢神経系の分類と機能
7回	筋の構造とはたらき	筋の構造と収縮の仕組み
8回	筋紡錘の構造と機能	筋紡錘の構造と機能、反射経路について
9回	脊髄・脳幹における運動制御	脊髄、脳幹による運動調節
10回	高次な運動制御	小脳、大脳基底核、大脳皮質による運動調節
11回	感覚の一般的性質	閾値や順応など、感覚受容器の性質について
12回	体性感覚	体性感覚の受容器と伝導路およびその機能
13回	味覚・嗅覚	味覚・嗅覚の受容器と伝導路およびその機能
14回	聴覚・前庭感覚	聴覚・前庭感覚の受容器と伝導路およびその機能
15回	視覚	視覚の受容器と伝導路およびその機能

成績評価	定期試験（筆記） 100%	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。
------	---------------	-------------	-----------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは講義内で全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	生理学 第3版	内田さえ、原田玲子他	医歯薬出
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

理学療法学科 夜間部			
科目	生理学Ⅲ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	小平 健太郎	学 年	1年生 後期
実績経験	資格	運動と健康に関わる現実的課題に対して、これまでトレーニングコーチとして運動選手から一般の方への運動指導経験を講義に反映して展開する。保健医療（理学療法・作業療法、看護、臨書検査、鍼灸理療、柔道整復 等）部門で生理学授業を担当している教員が医療従事者に必須な生体機能の調節機構について日常生活からの視点を例示しながら講義を実施する。	
	NSCA-CSCS, NSCA-CPT, 体育学修士		

授業の位置づけ	少子高齢化、健康長寿は今後ますます重要になる課題である。運動が身体にもたらす好影響は挙げられているが、適切なものでなくては逆効果にもなってしまうリスクも持っている。運動時の反応や調節作用を理解することで適切に運動を活用することができる。生理学Ⅰ、Ⅱの内容をベースに運動時にみられる調節反応を説明し、演習や動画教材も活用して解説する。 講義ならびに、演習・グループワークを併用して実施する。		
到達目標	①筋収縮に伴うエネルギー代謝を説明できる、②運動に伴う呼吸循環系の適応を説明できる ③筋力発揮に影響を与える要因について説明できる、④運動刺激に応じた内分泌調節を説明できる ⑤環境が運動に与える影響を説明できる、⑥運動と発育発達、加齢老化について説明できる ⑦目的に応じた運動処方の概要を説明できる		
授業形態	講義・演習	対面と遠隔の併用授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	運動の必要性、体力	運動に求められているもの、体力要素の分類
2回	エネルギー供給系①	筋収縮とエネルギー供給経路
3回	エネルギー供給系②	エネルギー基質の回復、運動と栄養
4回	運動と呼吸循環系①	運動に伴う呼吸循環系の調節・適応
5回	運動と呼吸循環系②	
6回	運動処方①	呼吸循環、エネルギー代謝からの運動処方
7回	運動と筋力①	筋力発揮に影響を与える要因
8回	運動と筋力②	運動単位、反射、脳の運動調節
9回	運動と内分泌①	運動刺激と内分泌応答
10回	運動と内分泌②	内分泌と糖代謝
11回	運動処方②	筋力トレーニングの運動処方
12回	運動と環境	高地、水中、暑熱・寒冷環境への応答
13回	運動と発育発達、加齢老化	発育・発達、加齢・老化に伴う運動機能の変化
14回	運動処方③	目的、対象に合わせた運動処方の立案、評価
15回	運動生理学総論	これまでの講義を踏まえての総合考察

成績評価	試験：85%、講義内小テスト15%の合計100%で評価する。 授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。	受講上のルール・留意点	試験、小テストともに記述式・選択式の併用で基本事項を踏まえたものを出题する。小テストは5回実施する。
------	--	--------------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
FBは全体に対して実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	入門運動生理学第4版	勝田茂 編著	杏林書院
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

		理学療法学科	夜間部
科 目	生理学実習	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	渡辺 信博	学 年	1年生 後期
実績経験	資格	生理学の研究者（専門家）としての経験と、教育機関における非常勤講師としての経験を活かし、ヒトに備わった生理機能について理解が深まるよう実習を行います。	

授業の位置づけ	生理学実習はグループ学習が基本となります。ヒトの生理機能の基本となる、血圧や心拍、心電図、皮膚感覚、筋電図について、安静時の状態や、どのような状況（刺激）によりどのような変動を示すのかを実際に自身の体で測定してもらい、さらにグループ内で比較することで個体差についても観察します。測定機器の操作を習得することや生理機能の変化を体験すること、さらに実施した内容をレポートとして文章と図でまとめることで、生理学で学んだ内容の理解をより深めることが本実習の目的です。		
到達目標	人体の生理機能についての理解を深める		
授業形態	対面授業		

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	実習の一般的解説	生理学実習における注意事項、授業の進め方の解説
2回	実習①～③の解説	実習内容の予習
3回 4回	①血圧と心拍数-1	血圧と心拍を測定し、安静時および体位変換の影響を理解する
5回 6回	②血圧と心拍数-2	血圧と心拍を測定し、運動負荷と寒冷負荷の影響を理解する
7回 8回	③心電図	心電図を記録し、深呼吸や精神負荷の影響を理解する
9回	実習内容のまとめ又は発表会	実習内容をまとめる、または、グループで実施した実習内容についてプレゼンテーションを実施する
10回	実習④、⑤の解説	実習内容の予習
11回 12回	④皮膚感覚	各皮膚部位による感覚点の測定を実施し、皮膚部位による感覚点の分布の違いや、冷却が皮膚感覚に及ぼす影響を理解する
13回 14回	⑤随意運動と表面筋電図	筋電図を記録し、安静時や運動時の屈筋と伸筋の働きを理解する
15回	発表会	グループで実施した実習内容についてプレゼンテーションを実施する

成績評価	- 各実習レポート 90% - 発表会やその他の提出物 10%	受講上のルール・留意点	毎実習ごとに各自レポートを作成し、次週の授業開始時に提出していただきます。また、授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えることはできません。
------	--	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
FBは講義内で全体に実施します。

	書名	著書名	出版社名
教科書	生理学実習NAVI 第3版	大橋敦子	医歯薬出版
参考書	生理学第3版	内田さえ・原田玲子ほか	医歯薬出版
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

理学療法学科 夜間部			
科 目	運動学 I	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	臼杵 寛	学 年	1年生 前期
実績経験	資格	実務経験23年（病院、老健、通所、訪問、予防事業等）の経験を踏まえ、実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	運動学とは身体運動の仕組みに関する学問であり、運動障害を治療対象とする理学療法士にとって、その理論的基礎をなす重要な科目である。本科目では、正常な運動とその仕組みに関する基礎知識を身につけるために、①力学原理に基づく運動の記述と解釈、②上肢及び体幹の筋骨格系の構造・機能と関節運動の関係、を中心に学修する。		
到達目標	①力学原理に基づく運動を理解し、説明できる。 ②上肢および体幹の筋骨格系の構造・機能と関節運動の関係を理解し、説明できる。		
授業形態	講義・演習		

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	生体力学の基礎	身体各部の名称、骨の名称
2回	生体力学の基礎	身体運動の面と軸、運動法則、身体とてこ
3回	関節運動と筋活動の基礎	関節の種類と運動軸、筋収縮の種類
4回	上肢帯と肩関節の運動	上肢帯の構造と種類、運動
5回	上肢帯と肩関節の運動	上肢帯の筋と作用
6回	肩関節の運動	肩関節の構造と種類、運動
7回	肩関節の運動	肩関節の筋と作用
8回	肘関節と前腕の運動	関節の構造と種類、肘関節と前腕の運動
9回	肘関節と前腕の運動	肘関節・前腕の筋と作用
10回	手関節と手の運動	手関節および手の関節の構造と種類、手関節と手の運動
11回	手関節と手の運動	腱鞘、指の運動と指背腱膜、手関節の筋と作用
12回	手関節と手の運動	手の筋と作用、手のアーチ、手の把持動作、手の変形
13回	頸椎の運動	椎骨の構造、椎骨の運動、椎間円盤、頸椎の運動と筋の作用
14回	胸郭の運動	胸郭の構造、呼吸運動と筋の作用
15回	腰椎の運動	腰椎の構造、腰椎の運動と筋の作用

成績評価	筆記試験100%	受講上のルール・留意点	指定の教科書は必ず持参すること。 演習・グループワークには積極的に参加すること。 本科目の内容は国家試験でも多く取り扱われますので、集中して受講すること。
------	----------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
適宜、個人及び全体に実施。

	書名	著書名	出版社名
教科書	PT・OTビジュアルテキスト 専門基礎 運動学 第2版	山崎敦 著	羊土社
オフィスアワー	臼杵：研修日（木曜日） メールでの連絡は随時（h-usuki@nichireha.ac.jp）		

理学療法学科				夜間部			
科 目		運動学Ⅱ		単位・時間数		1単位・30時間	
担当講師		臼杵 寛		学 年		1年生 後期	
実績経験		資格		実務経験23年（病院、老健、通所、訪問、予防事業等）の経験を踏まえ、実例を交えながら講義を行う。			
		理学療法士					
授業の位置づけ		運動学とは身体運動の仕組みに関する学問であり、運動障害を治療対象とする理学療法士にとって、その理論的基礎をなす重要な科目である。本科目では、正常な運動とその仕組みに関する基礎知識を身につけるために、①下肢の筋骨格系の構造・機能と関節運動の関係、②姿勢、③正常歩行について学修する。					
到達目標		①下肢の筋骨格系の構造・機能と関節運動の関係を理解し説明できる。 ②姿勢制御のメカニズムと姿勢分析の基礎を理解し、説明できる。 ③正常歩行のメカニズムを理解し、説明できる。					
授業形態		講義・演習					
授業計画							
回数	項目		講義内容				
1回	股関節の運動		骨盤と股関節の構造と種類、靱帯と作用				
2回	股関節の運動		股関節の運動と筋の作用				
3回	股関節の運動		股関節の安定性、片脚立位時の股関節の力学的特性				
4回	膝関節の運動		膝関節の構想と種類、靱帯と作用、半月の作用、膝蓋骨の作用				
5回	膝関節の運動		膝関節運動と筋の作用				
6回	足関節と足の運動		足関節および足の関節の構造と種類、足関節と足の運動				
7回	足関節と足の運動		足関節の筋と作用				
8回	足関節と足の運動		足のアーチと機能、足の変形				
9回	姿勢		姿勢の種類、名称、姿勢の安定条件、身体重心、重心線				
10回	姿勢		立位時の筋活動、姿勢制御、反射・反応、戦略				
11回	歩行		歩行周期、従来の用語・新しい用語				
12回	歩行		歩行のメカニズム、身体の動き				
13回	歩行		歩行時の筋活動、ロッカーファンクション				
14回	歩行		異常歩行、歩行分析、歩行まとめ				
15回	まとめ		復習				
成績評価	筆記試験100%		受講上のルール・留意点		指定の教科書は必ず持参すること。 演習・グループワークには積極的に参加すること。 本科目の内容は国家試験でも多く取り扱われますので、集中して受講すること。		
課題やレポートに関するフィードバック							
適宜、個人及び全体に実施。							
	書名			著書名		出版社名	
教科書	PT・OTビジュアルテキスト 専門基礎 運動学 第2版			山崎敦 著		羊土社	
	観察による歩行分析			キルステン・ゲッツ・ノイマン		医学書院	
オフィスアワー	臼杵：研修日（木曜日） メールでの連絡は随時（h-usuki@nichireha.ac.jp）						

科 目	人間発達学		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	黒木 光		学 年	1年生 後期
実績経験	資格	実務経験 23年 理学療法士として、総合病院・整形外科クリニック・老健・訪問リハ・デイケア・放課後デイにて行ってきた実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。 国際ボイタ認定セラピスト、DynamicNeuroMuscular(DNS) Practitioner Movement Link認定セラピスト		
	理学療法士			
授業の位置づけ	この授業では人間の一生涯における発達を、身体的・精神的・社会的な視点からその特徴を説明し、自身や他人の思考や行動を通して理解を深める。幅広い世代で医療を実践するために、各年代での機能の特徴を理解し、行動を実践するためのプロフェッショナルな視点について解説する。乳児の運動・行動を学びながら、人間の観察力を高め、専門的な技術の基礎を作る。 授業方法は講義が50%、演習が50%である。			
到達目標	人間の発達の年代ごとの特徴を幅広い視点から捉え、説明することができる。 乳幼児期の反射・反応の意義を理解し、説明することができる。 運動発達の変化が著しい乳幼児期の運動発達を理解し、説明することができる。			
授業形態	講義・演習		併用授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	発達の概念	発達期の区分、発育曲線、発達の原則、運動発達
2回	発達理論	発達理論（エリクソン、ピアジェ、フロイト、その他）
3回	胎児・新生児期	胎児・新生児の発達、評価
4回	乳児期	発達、反射・反応、発達の評価
5回	幼児期	発達、反射・反応、社会的な発達
6回	学童期の発達	親から友人へ、学校生活への移行
7回	運動発達	0～3か月までの運動発達について
8回	運動発達	4～6か月までの運動発達について
9回	運動発達	7～9か月までの運動発達について
10回	運動発達	10～18か月までの運動発達について
11回	青年期の発達	第二次性徴、脳の発達と行動
12回	成人期の発達	生活の変化、ストレス、メタボリックシンドローム
13回	老年期の発達	老化による機能低下、生きがい
14回	感覚系の発達	感覚系・言語・生活動作
15回	運動系の発達	乳幼児期の運動発達のまとめ

成績評価	定期試験：筆記試験 70％ レポート課題 30％	受講上のルール 留意点	授業開始時に毎回振り返りの課題を出しますので、必ず復習して臨んでください。 演習（実技）では動きやすい服装（基本はジャージ、短パン、Tシャツ）の準備をすること。
------	-----------------------------	----------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
毎回、授業の疑問点について、確認シートを作成する。それに対するフィードバック（FB）を毎回おこなう。

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書	イラストでわかる人間発達学	上杉 雅之	医歯薬
オフィスアワー	メールでの連絡は随時 h-kuroki@nichireha.ac.jp		

		理学療法学科	夜間部
科 目	リハビリテーション医学概論Ⅰ	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	草野 修輔	学 年	1年生 前期
実績経験	資格	20年以上にわたり、リハビリテーション専門医として、臨床においてリハビリテーション医療を行ってきた。また専門学校及び大学において、作業療法学科の学生にリハビリテーション医学の講義も行ってきた。その経験を活かし、リハビリテーション医学全般についてわかりやすく講義する。	
	リハビリテーション専門医		

授業の位置づけ	リハビリテーション医学の歴史、定義、関連職種、障害評価、各種対象疾患のリハビリテーションなどについて紹介し、これからの4年間で学習するリハビリテーション医学について、全般的理解を深めてもらう。		
到達目標	①リハビリテーションの歴史や定義、関連職種、関連法規・社会福祉制度についての説明できる。②リハビリテーションに必要な障害理解、評価法、治療法などについて説明できる。③リハビリテーションが関与する代表的な各種疾患について、病態・リハビリテーションなどについて説明できる。		
授業形態	講義		

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	リハビリテーション医学の歴史と定義、障害分類、リハ関連用語	リハビリテーション医学の歴史的背景や定義、障害分類、リハビリテーション関連用語等について紹介する
2回	リハビリテーションスタッフおよび関連職種、リハビリテーション関係法規および社会福祉制度	リハビリテーションスタッフ・関連職種、リハビリテーション関係法規・社会福祉制度について紹介する
3回	障害学（その1：運動障害・感覚障害）	リハビリテーションにおける障害評価として、運動障害・感覚障害について解説する
4回	障害学（その2：高次脳機能障害 他）	リハビリテーションにおける障害評価として、各種高次脳機能障害他について解説する
5回	各種障害の評価法・検査法、物理療法	リハビリテーションにおける各種障害評価法、関連する検査法、物理療法等について解説する
6回	補助具・義肢・自助具	リハビリテーションにおける各種補装具・義肢・自助具などについて紹介する
7回	脳血管障害のリハビリテーション	脳血管障害の病態と障害、実際のリハビリテーションについて解説する
8回	脊髄損傷のリハビリテーション	脊髄損傷の病態と障害、実際のリハビリテーションについて解説する
9回	整形外科疾患のリハビリテーション	骨関節疾患、切断のリハビリテーションについて解説する
10回	小児疾患のリハビリテーション	リハビリテーションの対象となる代表的な小児疾患とそのリハビリテーションについて解説する
11回	がんのリハビリテーション	がんのリハビリテーションについて解説する
12回	内部障害のリハビリテーション	呼吸器疾患、心臓疾患等の内部障害とリハビリテーションについて解説する
13回	認知症のリハビリテーション	認知症の定義、種類、評価法、リハビリテーションについて解説する
14回	廃用症候群他のリハビリテーション	廃用症候群、ロコモ、サルコペニア等の病態とリハビリテーションについて解説する
15回	総まとめ	第1回から第14回までの講義の総まとめ

成績評価	定期試験50%＋レポート課題50%	受講上のルール・留意点	毎回、講義資料を配布するので、しっかりと復習すること
------	-------------------	-------------	----------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
毎回、授業内容に則したミニテストを出題するので、しっかりと復習すること

	書名	著書名	出版社名
教科書	特に指定なし		
オフィスアワー	毎週火曜日および金曜日16：30～17：30		

理学療法 学科 夜 間 部			
科 目	理学療法概論	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	高林 礼子	学 年	1年生 前期
実績経験	資格 理学療法士	総合病院・老人福祉施設・障害者施設・訪問等の経験 を踏まえて講義を行う。	経験年数 27年

授業の位置づけ	この授業では理学療法業務、理学療法士の役割を理解し、説明できるようになることを目的とする。医療・福祉分野における理学療法業務を実施するために、様々な業務の特徴を理解すること、プロフェッショナルの視点を持つための基礎を築くことが求められる。		
到達目標	理学療法業務、理学療法士の役割について理解し、説明することができる。 理学療法士の倫理観、行動規範について理解し、説明することができる。		
授業形態	講義・演習・実習	併用授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	総論	理学療法の概念と歴史について学ぶ
2回	総論	理学療法士の法律について学ぶ
3回	総論	理学療法士の関連法規
4回	総論	理学療法の意義と役割
5回	総論	理学療法の対象
6回	総論	理学療法の方法
7回	総論	理学療法士の組織
8回	総論	理学療法士教育
9回	各論	医療・保健分野の理学療法
10回	各論	地域リハビリテーションと理学療法
11回	各論	医療事故とリスクマネジメント
12回	各論	個人情報の管理と対象者の権利
13回	各論	理学療法士を目指す学生に求められるもの
14回	各論	臨床教育の実践
15回	各論	理学療法士と研究

成績評価	定期試験：筆記試験100%	受講上のルール・留意点	理学療法士とは何か、理学療法とは何かの理解を深めること
------	---------------	-------------	-----------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
個別及び全体にフィードバックする。

	書名	著書名	出版社名
教科書	理学療法学テキストⅠ 理学療法概論第4版	監修 千住秀明	神陵文庫
参考書	P T入門イラストでわかる理学療法概論	監修 上杉雅之	医歯薬出版株式会
オフィスアワー	メールでの連絡は随時 r-takabayashi@nichireha.ac.jp		

		理学療法学科	夜間部
科 目	病態運動学	単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	鈴木 雅男	学 年	1年生 後期
実績経験	資格	実務経験 38年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	理学療法士は、患者の移動手段の歩行に対して働きかけることが多い。また患者の歩行は様々な疾患や障害により影響を受け、特徴的な歩容を呈している。そのため疾患の特徴を理解し、歩容を把握することは、理学療法評価や治療において基本となり、重要な要素である		
到達目標	各疾患の病態を理解し、その特徴的な歩容とその成因を理解する。		
授業形態	講義・実習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	歩行総論	歩行周期と要素、異常歩行の概要と原因、運動器疾患による異常歩行
2回	異常歩行各論	運動器疾患による異常歩行演習
3回	異常歩行各論	疼痛による異常歩行
4回	異常歩行各論	演習
5回	異常歩行各論	末梢性筋・神経障害による異常歩行
6回	異常歩行各論	演習
7回	異常歩行各論	中枢神経疾患による異常歩行
8回	異常歩行各論	演習

成績評価	課題：100%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで集中する。 演習の場面では積極的に発言する。
------	---------	-------------	-------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
随時授業中にフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	プリント配布		
オフィスアワー	担当授業前後の時間		

理学療法学科 夜間部			
科目	総合演習（PBL）Ⅰ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	高橋 豊	学年	1年生 後期
実績経験	資格	高橋：実務経験12年 介護老人保健施設・訪問リハビリテーション・デイケア・デイサービスにて勤務。実務経験を活かし、事例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	PBL授業では、学生同士でのグループワークを通して共同で問題に対し乗り越え、学生・教員が共通の目標・目的に向かって一緒に活動することを学習する。医療者としての心身を鍛え、グループに対する責任感と奉仕の精神を身に着ける。これにより将来、医療の専門職として社会に貢献するのに必要な専門職連携の基盤を育成する。 初年次に学び2年次に行うPBL活動へとつながる学習です。チームとして明確な目標をもってチーム内でコミュニケーションを大切にして、チームワークの重要性を学習する。		
到達目標	1. チーム内でコミュニケーションが取れて明確な目標を定めることができる。 2. チームの目標を達成するために、傾聴と主体的に行動できる。 3. 自ら疑問をもって解決に向けてチームとともに活動できる。		
授業形態	演習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	PBLに関する基礎知識の学習
2回		
3回	シナリオ検討	わからない言葉を調べてグループで共有
4回		わからない言葉を調べてグループで共有
5回		症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論する
6回		症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論する
7回		症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論する
8回		症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論する
9回		症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論する
10回		症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論する
11回	発表準備・まとめ	発表に向け、内容や構成を決めてまとめる
12回		発表に向け、内容や構成を決めてまとめる
13回	発表	まとめた内容を発表
14回		まとめた内容を発表
15回	シナリオ解説、ふりかえり	症例について解説、演習についてよかった点や今後の課題を整理する

成績評価	授業内発表：50% 課題提出：50%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 グループワーク課題は積極的に行う。
------	-----------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	配布資料		
オフィスアワー	高橋:授業前後及びメール(y-takahashi@nichireha.ac.jp)		

理学療法学科 夜間部			
科 目	検査測定法 I	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	高橋 豊 木下 修	学 年	1年生 後期
実績経験	資格	高橋：実務経験12年 介護老人保健施設・訪問リハビリテーション・デイケア・デイサービスにて勤務。実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。 木下：義肢装具士として43年、製作・適合判定に従事していました。 理学療法士として33年、総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・訪問・デイサービス・保健所・教育機関は大学・大学院などに従事していました。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	検査測定・評価の意義と方法を理解することを目的とし、対象者に対して適切な評価を行えるよう学習する。 理学療法評価の中でも行う頻度の高い関節可動域測定について学ぶ。		
到達目標	評価・血圧測定・バイタル測定・肢長周径・呼吸機能検査・循環機能検査ができる。 関節可動域測定の意義・目的・方法を理解し、実技・記録ができる。		
授業形態	講義・実習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	総論	評価の意義・目的、ICIDH、ICF
2回	一般的評価事項	理学療法における診療記録(医療情報のとり方、医療面接)
3回	形態測定①	四肢長および肢節長の測定
4回	形態測定②	周径の測定
5回	知覚検査①	知覚とは、表在感覚
6回	知覚検査②	深部感覚、複合感覚、立体認知覚
7回	関節可動域測定①	基本的肢位・運動方向、表示法、肩甲帯、肩関節(屈伸)
8回	関節可動域測定②	肩関節(内外転・内外旋)
9回	関節可動域測定③	肩関節(水平屈曲伸展)、肘関節(屈伸)
10回	関節可動域測定④	前腕、手関節、股関節(屈伸、内外転)
11回	関節可動域測定⑤	股関節(内外旋)、膝関節(屈伸)
12回	関節可動域測定⑥	足関節(底背屈)、足部(外がえし内がえし、内外転)
13回	関節可動域測定⑦	頸部、体幹
14回	関節の変形	関節の変形について
15回	総復習	検査実技

成績評価	筆記 75% 実技 15% 小テスト 10%	受講上のルール・留意点	実技が行いやすい服装での参加
------	---	-------------	----------------

課題やレポートに関するフィードバック
全体へのフィードバックを実施するとともに、必要に応じ個別にも行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	理学療法評価学 第6版補訂版	松澤正/江口勝彦	金原出版
オフィスアワー	高橋:授業前後及びメール(y-takahashi@nichireha.ac.jp) 木下:授業前後及びメール(o-kinoshita@nichireha.ac.jp)		

理学療法学科 夜間部			
科 目	検査測定法Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	高橋 豊 吉葉則和	学 年	1年生 後期
実績経験	資格	高橋：実務経験12年 介護老人保健施設・訪問リハビリテーション・デイケア・デイサービスにて勤務。実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。 吉葉：実務経験24年理学療法士として総合病院、クリニック、維持期を経験後、教育機関にて学生教育にかかわる。経験談も含め講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	理学療法評価の中でも行う頻度の高い徒手筋力検査法について学ぶ。		
到達目標	徒手筋力検査法の意義・目的・方法を理解し、実技、記録ができる。		
授業形態	講義・実習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	筋力テストについて	評価の意義・目的
2回	徒手筋力検査法①	上肢の筋力テスト1
3回	徒手筋力検査法②	上肢の筋力テスト2
4回	徒手筋力検査法③	上肢の筋力テスト3
5回	徒手筋力検査法④	上肢の筋力テスト4
6回	徒手筋力検査法⑤	上肢の筋力テスト5
7回	徒手筋力検査法⑥	上肢の筋力テスト6
8回	徒手筋力検査法⑦	下肢の筋力テスト1
9回	徒手筋力検査法⑧	下肢の筋力テスト2
10回	徒手筋力検査法⑨	下肢の筋力テスト3
11回	徒手筋力検査法⑩	下肢の筋力テスト4
12回	徒手筋力検査法⑪	頭部・体幹・その他
13回	徒手筋力検査法⑫	頭部・体幹・その他
14回	徒手筋力検査法⑬	頭部・体幹・その他
15回	総復習	検査実技

成績評価	筆記75% 実技15% 小テスト10%	受講上のルール・留意点	実技が行いやすい服装での参加
------	---------------------	-------------	----------------

課題やレポートに関するフィードバック
全体へのフィードバックを実施するとともに、必要に応じ個別にも行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	新・徒手筋力検査法 原著第10版	Dale Avers他著、津山直一他訳	協同医書
オフィスアワー	高橋:授業前後及びメール(y-takahashi@nichireha.ac.jp) 吉葉:授業前後及びメール(n-yoshiha@nichireha.ac.jp)		

科 目	運動療法学Ⅰ		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	篠田 良平		学 年	1年生 後期
実績経験	資格	実務経験 30年 理学療法士として、回復期病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市や区の心身障害者福祉センター・通所センター・保健センターとクリニックにて勤務歴があり、実務経験を活かし実例を交えながら講義を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	運動療法は理学療法の根幹となる部分である。技術の派生は多岐にわたる。その根本をなす運動療法の目的を理解するためには、他科目で学習した解剖・生理・運動学などを統合していく必要があ、再確認の場ともなる。また、実技を実際行うことで、相手に対する行動として、理学療法士のたしなみや配慮の必要性も感じて欲しい。		
到達目標	各種運動療法の目的や効果の学習と運動療法の実践		
授業形態	講義・演習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	運動療法概論	運動療法とは、運動の歴史・種類と効果
2回	運動の生理	筋収縮の理論
3回	関節・筋の構造と姿勢	運動学と運動療法、姿勢と関節構造
4回	運動療法の種類	運動療法の種類とリスク管理
5回	組織の損傷と回復	組織の損傷と回復の過程
6回	関節可動域訓練	目的・適応・禁忌・注意点
7回	関節可動域訓練	実技練習
8回	関節可動域訓練	実技練習
9回	ストレッチ	目的・適応・禁忌・注意点
10回	ストレッチ	実技練習
11回	ストレッチ	実技練習
12回	筋力増強訓練	目的・適応・禁忌・注意点
13回	筋力増強訓練	実技練習
14回	筋力増強訓練	実技練習
15回	総括	授業まとめ

成績評価	1) 筆記試験80%、提出物及び小テスト20%、2) 欠格要件（授業時間1/3以上の結石者には単位を与えない）	受講上のルール・留意点	他者に対する礼儀と配慮、必要であれば補講又は実技練習を設ける
------	---	-------------	--------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
メールでの添付にて提出、添削によるフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	運動療法学 障害別アプローチの理論と実際 第2版	市橋則明	文光堂
参考書			
オフィスアワー	担当授業の前後		

科 目	臨床見学実習 I		単位・時間数	1単位・45時間
担当講師	理学療法学科教員		学 年	1年生 通年
実績経験	資格	総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・訪問・ディサービス・保健所・教育機関などに従事しています。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	病院や診療所、介護施設で見学実習を実施する。医療機関・介護施設における理学療法士の役割や仕事の内容、関連職種との連携、チーム医療への理解を学習する。基礎知識の確認や実技演習などを中心に行う。 ・臨床現場の理学療法士の役割、具体的な仕事内容を説明できる。 ・医療・介護・福祉現場で働く専門職としての心構えを理解し説明できる。 ・見学実習をとして、今後の基礎学習に取り組むべきかを明確にし説明できる。		
到達目標	理学療法士の仕事内容について理解し説明できる。 リハビリテーションの考え方がどのように医療現場や介護福祉施設で実践されているのか理解できる。		
授業形態	実習		

授業計画

		実習内容
	1) 病院・施設の理学療法士から、各施設での理学療法士の役割を学ぶ。 2) 医療者として理学療法士の持つ責任と心構えについて学ぶ。 3) 理学療法士が患者・利用者に対し、どのような接し方をしているか学ぶ。 4) 患者・利用者とのコミュニケーションを通して、理学療法士に求められるものを学ぶ。 5) 多職種との連携について学ぶ。 6) 医療における礼節・態度・接遇について学ぶ。	

成績評価	臨床実習指導者の評価 および担当教員の評価 提出物・レポート	受講上のルール・留意点	実習施設での遅刻・早退・欠席は認めない。 実習指導者に対し、報告・連絡・相談は必ず行う。 感染対策に対して、施設の規則に準じて行動する。
------	--------------------------------------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
実習終了後に、教員よりフォローアップを実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書			
オフィスアワー	実習担当教員・担任と連絡を取る		

科 目	自然科学		単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	野村 崇		学 年	2年生 後期
実績経験	資格	義肢装具士として義肢装具の設計・製作・適合に関わってきた経験を活かし、学ぶ内容がどのように臨床に関わるのか、具体例を交えながら講義を行う。		
	義肢装具士			
授業の位置づけ	理学療法に関連する諸学問分野、特に運動学を理解するために必要な、物理学の基礎知識を身に付ける。			
到達目標	1．専門科目を理解するために必要な物理学の知識を習得する。 2．現実の場面で科学的な物の見方ができるようになる。			
授業形態	講義		対面授業・遠隔授業・対面と遠隔の併用授業のいずれも可能性あり	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	力の合成 1	複数の力のベクトルの合成
2回	力の合成 2	平行な力のベクトルの合成
3回	力の分解	力のベクトルの複数方向への分解
4回	三角形の比率	三角比・三角関数
5回	力のモーメント 1	力のモーメントの概念と求め方
6回	力のモーメント 2	力が斜めにかかる場合の力のモーメントの求め方／輪軸にかかる力の求め方
7回	てこ	テコの種類と特徴
8回	輪軸と滑車	輪軸・滑車にかかる力の求め方
9回	速度と加速度	速度・加速度の求め方
10回	力と質量と加速度	力・質量・加速度の関係と求め方
11回	位置・速度・加速度・力	位置のグラフからの速度・加速度・力を読み取る方法
12回	重心	重心の概念と重心位置の求め方
13回	様々な物理量	物理学で用いる各種の物理量の定義
14回	総復習 1	理学療法士国家試験の過去問を踏まえた総復習（力のモーメントに関して）
15回	総復習 2	理学療法士国家試験の過去問を踏まえた総復習（その他に関して）

成績評価	試験100%	受講上のルール・留意点	全講義終了後に筆記試験を行う。
------	--------	-------------	-----------------

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー			

理学療法学科 夜 間 部				
科 目	運動学実習		単位・時間数	1単位・45時間
担当講師	篠田 良平		学 年	2年生 前期
実績経験	資格	実務経験 30年 理学療法士として、回復期病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市や区の心身障害者福祉センター・通所センター・保健センターとクリニックにて勤務歴があり、実務経験を活かし実例を交えながら講義を行う。		
	理学療法士			
授業の位置づけ	ヒトの特徴を脳機能（情動含む）・身体機能面から分析できる力を養う。 なかでも基本的動作能力について分析できる力を養う。 ICFの分類に基づき動作を考察できる思考力を養う。			
到達目標	講義のもと学生間の模擬実習を通じて患者の動作を理解していく			
授業形態	講義及び実技		対面授業	
授業計画				
回数	項目	講義内容		
1回	臨床動作分析総論	臨床における動作分析の目的・意義		
2回		運動制御理論と運動学習理論		
3回	歩行	正常歩行と異常歩行		
4回				
5回	正常動作	起き上がり動作		
6回		立ち上がり動作		
7回		歩行		
8回	姿勢観察の基礎	姿勢観察の方法		
9回	演習：起立・着座	姿勢観察・推論・分析		
10回				
11回				
12回				
13回				
14回	動作観察の基礎	動作観察の方法		
15回	演習：歩行	動作観察・分析・推論		
16回				
17回				
18回				
19回	演習：寝返りからの起き上がり	姿勢観察・分析・推論		
20回				
21回				
22回				
23回	臨床動作分析	治療につなげる動作分析について		
成績評価	レポート他	受講上のルール・留意点	・動きやすい服装で受講すること ・授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には単位を与えない	
課題やレポートに関するフィードバック				
授業中の課題に対しては、随時質問を受け付ける。				
	書名	著書名	出版社名	
教科書	動作分析 臨床活用講座-バイオメカニクスに基づく臨床推論の実践	石井真一郎	メジカルビュー	
オフィスアワー	授業前後の休憩時間			

理学療法 学科				夜 間 部	
科 目	病理学概論		単位・時間数	2単位・30時間	
担当講師	何 聰 （カ ソウ）		学 年	2年生 前期	
実績経験	資格				
	人体病理病態学 PhD				
授業の位置づけ	病理学は疾病の基本を扱うことから、臨床医学を学ぶうえで最も重要な基礎医学である。本授業では、実際の疾患の原因や病態から説明し、病理学を正しく深く理解した上で、病理学的な考え方を身に着けようと解説する。				
到達目標	国家試験に出題される範囲内での病理学の基本的な知識を理解する				
授業形態	講義		対面授業		
授業計画					
回数	項目		講義内容		
1回	病理学概要、病因論		病理学の概念、診断病理、実験病理について理解する疾病の外因・内因を理解する		
2回	退行性病変 進行性病変		変生、萎縮、壊死、アポトーシスについて学ぶ 肥大、過形成、化生、異型性及び再生について学ぶ		
3回	代謝障害		生命を維持するための代謝及び代謝異常により引き起こされる病態について学ぶ		
4回	循環障害		血液循環の基礎、局所循環障害の病因・病態について理解する		
5回	循環障害 炎症		全身循環について学ぶ 炎症の経過と生体の反応を理解する		
6回	感染症		感染症の成り立ち及び感染症を引き起こす主な病原体について理解する		
7回	腫瘍		腫瘍の特徴、命名と分類、形態、悪性腫瘍の進展形式を学ぶ		
8回	腫瘍		進行度、発生原因と発がんメカニズムを学ぶ		
9回	先天異常・奇形		遺伝性疾患、染色体異常と奇形の基礎を学ぶ		
10回	循環器		心臓の疾患を学ぶ		
11回	循環器 呼吸器		血管の疾患を学ぶ 上気道、肺に見られる一部の疾患について学ぶ		
12回	呼吸器		肺、胸膜に見られる炎症性疾患、腫瘍性疾患を学ぶ		
13回	神経系		脳血管障害、中枢神経系の感染症, 脱髄疾患などの病理学変化を学ぶ		
14回	神経系 運動器		主要な神経変性疾患の病理学変化を学ぶ 骨、軟骨に見られるの疾患について学ぶ		
15回	運動器 全体復習		関節、筋肉の疾患について学ぶ		
成績評価	受講態度、出席状況、中間テスト、定期試験を通して総合的に評価する		受講上のルール・留意点	試験の出題範囲については、教科書で学んだ内容と国家試験の必須ポイント内です。 毎回の授業は教科書を必ず使用する。	
課題やレポートに関するフィードバック					
	書名		著書名		出版社名
教科書	標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 病理学		梶原博毅 著		医学書院
参考書	ルービン カラー基本病理学		エマニュエル・ルービン著 河原ら監訳		西村書店
オフィスアワー	授業前後の休憩時間				

理学療法学科 夜 間 部			
科 目	臨床心理学	単位・時間数	2単位・ 30時間
担当講師	小野寺 哲夫	学 年	2年生 前期
実績経験	資格	神奈川県藤沢市教育委員会学校教育課所属学校訪問相談員として4年間、文科省認定スクールカウンセラーとして、神奈川県海老名市（8年）、大和市（3年）、鎌倉市（3年）の小中学校にて、児童生徒、保護者、教員の相談、およびカウンセリング、管理職に対するコンサルテーション等に従事してきた。2020年には国家資格公認心理師を取得。これらの実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。	
	公認心理師・臨床心理士 Ph. D		

授業の位置づけ	臨床心理学は、ケアの専門家、および医療専門職が現場で患者とかわっていく上で必須の知識でありスキルである。授業では、臨床心理学の基礎知識に加えて、代表的な心理検査法や各種心理療法の基礎知識について、臨床現場での20年のカウンセラーとしての経験から得られた実践的なカウンセリングスキルやクライアントとのエピソードを交えて解説する。授業においては、アクティブラーニングの視点から心理テストやロールプレー等の実習を積極的に取り入れた、参加型の授業を展開する。また、PT/OTの国試対策も視野に入れて授業を行っていく。		
到達目標	P Tの国家試験を見据えた上での臨床心理学の基礎理論、心理検査および心理療法の各種技法の習得。		
授業形態	講義・演習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	臨床心理学の概論	臨床心理学とは何か 臨床心理学の原則 臨床心理学の職業倫理
2回	臨床心理学の定義	臨床心理学の定義と臨床心理学の3つのパラダイム
3回	フロイト精神分析①	フロイト精神分析の成り立ち フロイトの局所論と構造論
4回	フロイト精神分析②	防衛機制（基礎）代表的防衛機制
5回	フロイト精神分析③	防衛機制（応用）転移と逆転移
6回	アタッチメント理論	ボウルビーのアタッチメント（愛着）理論とウィニコットの対象関係論
7回	心理アセスメント①	心理検査の定義 信頼性と妥当性 心理検査の分類
8回	心理アセスメント②	知能検査、性格検査（質問紙法・投影法）、神経心理学的検査、作業検査
9回	カール・ロジャーズ①	ロジャーズの経歴 自己理論 非指示療法から来談者中心療法まで
10回	カール・ロジャーズ②	セラピストの中核3条件 傾聴技法 十分に機能する人間
11回	交流分析①	交流分析（TA）の哲学 5つの自我状態の構造分析と機能分析
12回	交流分析②	ストローク分析 ストロークエコノミー OK牧場（人生の立場）
13回	森田療法	森田正馬の生涯 森田療法のキーワード 精神交互作用 生の欲望
14回	認知行動療法①	認知行動療法（CBT）の全体像 6つの基本原則 自動思考とスキーマ
15回	認知行動療法②	認知行動療法（CBT）の応用 認知再構成法と問題解決法

成績評価	期末レポート課題（90％）、毎回のミニレポート課題（10％）で評価する。	受講上のルール・留意点	毎回のミニレポート課題は、授業で学んだ内容について、感想や自分の意見、質問等を比較的自由に書いて提出する。 毎回の授業と試験において、教科書は必ず使用する。
------	---	--------------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
原則としては、毎回のミニレポート課題についてのフィードバックは行われませんが、必要に応じて行う場合もある。

	書名	著書名	出版社名
教科書	『PT・OTのための臨床心理学テキスト（改訂）』	小野寺哲夫	JFAパブリッシング
参考書	伊藤絵美の認知行動療法入門講義 上・下	伊藤絵美	公益財団法人 矯正協会
オフィスアワー	「授業前後の休憩時間」		

理学療法学科 夜間 部			
科 目	内科学・老年学Ⅰ	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	本間 博	学 年	2年生 前期
実績経験	資格	日本内科学会認定内科医、日本循環器学会専門医、日本超音波医学会専門医、日本医師会認定産業医、日本心臓病学会特別会員。今までの医科大学での内科学講義、大学病院臨床経験を活かした授業を行う。	
	医師		

授業の位置づけ	チーム医療でないと治療効果が得られないケースが多くなっている現状で、内科学・老年学を学ぶことは病態を理解し共有する点で重要である。 医療専門職として必要な内科疾患の病態・検査・治療について理解する。 また、高齢者が多くなり複数の病気を持つ場合が多いので老年学を通して高齢者の病態を理解できるようになることも大事である。 授業方法は講義中心で、課題も毎回提示する。		
到達目標	主要な内科疾患の概念を理解し、高齢者の特有な病態を説明できるようになる。 その上で検査、診断、治療といった過程を理解できるようになる。		
授業形態	講義	遠隔授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	内科学総論	内科学の概念、症候学、リハビリテーションとの関係を説明できる。
2回	老年学総論	老年学の概念、症候学、リハビリテーションとの関係を説明できる。
3回	感染症 1	感染症総論：病原体の種類、感染の経過、感染経路、予防、治療を説明できる。
4回	感染症 2	代表的な細菌感染症、ウイルス感染症、真菌感染症の病態、検査、治療を説明できる。
5回	循環器疾患 1	循環生理、検査を説明できる。高血圧、メタボリックシンドロームの病態、治療の説明ができる。
6回	循環器疾患 2	急性冠症候群（狭心症、心筋梗塞）の病態、検査、治療の説明ができる。
7回	循環器疾患 3	弁膜症、先天性心疾患、心不全、不整脈の病態、検査、治療を説明できる。
8回	呼吸器疾患 1	呼吸器の解剖、機能、検査の説明ができる。感染性肺疾患の病態、検査、治療を説明できる。
9回	呼吸器疾患 2	慢性閉塞性肺疾患、拘束性肺疾患、呼吸不全の病態、検査、治療の説明ができる。腫瘍性肺疾患、アレルギー性肺疾患の病態、検査、治療を説明できる。
10回	消化器疾患 1	消化器各臓器の解剖、機能、検査を説明できる。食道、胃の疾患の病態、検査、治療の説明ができる。
11回	消化器疾患 2	小腸、大腸、腹膜疾患の病態、検査、治療を説明できる。
12回	肝、胆、膵臓疾患	肝、胆、膵の解剖、機能、検査を説明できる。各疾患の病態、検査、治療を説明できる。
13回	脳神経疾患 1	脳神経の解剖、機能、症候、検査を説明できる。
14回	脳神経疾患 2	脳血管障害の病態、検査、治療を説明できる。
15回	脳神経疾患 3	脳腫瘍、脊髄疾患、脱髄・変性疾患の病態、検査、治療を説明できる。

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	定期試験は五者択一の50題。 毎回提示する課題も五者択一問題でトレーニングしていく。
------	------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
事務局を通してメールで質問を受け付ける。

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし		
参考書	なし		
オフィスアワー	事務局を通してメールで質問を受け付ける。		

理学療法学科 夜間 部			
科 目	内科学・老年学Ⅱ	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	本間 博	学 年	2年生 後期
実績経験	資格	日本内科学会認定内科医、日本循環器学会専門医、日本超音波医学会専門医、日本医師会認定産業医、日本心臓病学会特別会員。今までの医科大学での内科学講義、大学病院臨床経験を活かした授業を行う。	
	医師		

授業の位置づけ	チーム医療でないと治療効果が得られないケースが多くなっている現状で、内科学・老年学を学ぶことは病態を理解し共有する点で重要である。医療専門職として必要な内科疾患の病態・検査・治療について理解する。また、高齢者が多くなり複数の病気を持つ場合が多いので老年学を通して病態を理解できるようになることも大事である。授業方法は講義中心で課題も毎回提示する。		
到達目標	主要な内科疾患の概念を理解し、高齢者の特有な病態も説明できるようになる。その上で検査、診療、治療の過程を理解できるようになる。		
授業形態	講義	遠隔授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	内分泌疾患 1	内分泌器官の解剖、機能を説明できる。視床下部、下垂体疾患の病態、検査、治療を説明できる。
2回	内分泌疾患 2	甲状腺、副腎、膵臓、卵巣、精巣疾患の病態、検査、治療を説明できる。
3回	糖尿病、代謝疾患	糖尿病、脂質代謝異常、痛風の病態、検査、治療を説明できる。
4回	アレルギー、免疫疾患	アレルギー、免疫のメカニズムを説明できる。 アレルギー疾患、免疫不全症の病態、検査、治療を説明できる。
5回	膠原病 1	膠原病の概念の変遷、病態、検査、治療を説明できる。
6回	膠原病 2	関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、シェーグレン症候群、強皮症、ベーチェットなどの疾患の病態、検査、治療を説明できる。
7回	腎、泌尿器疾患	腎臓、泌尿器の解剖、機能を説明できる。急性・慢性腎障害、腎不全、尿管・膀胱・前立腺疾患の病態、検査、治療を説明できる。
8回	血液浄化療法、臓器移植療法	急性腎不全症例による透析例が増加しているが、透析と移植の現状を理解する。
9回	血液疾患	血液・造血器疾患の概念の変遷、病態、検査、治療を説明できる。
10回	骨代謝と疾患、フレイル、ロコモティブ	骨の解剖、代謝を説明できる。骨粗鬆症の病態、検査、治療を説明できる。また、フレイル、ロコモティブを理解する。
11回	中毒、環境因子による疾患	中毒にはどのようなものがあり、環境要因がどのように関わっているのかを理解できる。
12回	緩和ケアと終末医療	終末医療は現在どうなっているのか、また緩和ケアの現状を理解する。
13回	IgG4関連疾患	新しい全身疾患として注目されているIgG4関連疾患について理解する。
14回	内科と皮膚疾患	内科疾患と皮膚疾患との関連について理解する。
15回	認知症	認知症とどう向き合うかを考え、理解する。

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	定期試験は五者択一問題50題。毎回の課題も五者択一問題でトレーニングしていく。
------	------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
事務局を通してメールで質問を受け付ける。

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし		
参考書	なし		
オフィスアワー	事務局を通してメールで質問を受け付ける。		

理学療法学科 夜 間 部			
科 目	整形外科学Ⅰ	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	星野雄一	学 年	2年生 前期
実績経験	資格	整形外科専門医 元脊椎脊髄外科指導医、元日整会認定リハビリテーション認定医	
	医師		

授業の位置づけ	整形外科は、骨・関節・筋肉・神経などにより構成される運動器の障害に対して、保存治療と手術を含む幅広い診療を担当している。診療においては、保存的・手術治療のいずれにおいても理学療法士や作業療法士の関与が不可欠である。整形外科学Ⅰでは運動器に関する基礎的事項と身体部位別の外傷・疾患に関する講義を行う。		
到達目標	整形外科は美容外科とは違うことを認識し、骨・関節・筋肉・神経など運動器の構成要素の解剖や生理の基礎知識が、診療においていかに重要であるかを理解する。日常診療で遭遇する頻度の高い運動器の外傷や疾患に対する整形外科的診断法や治療法、さらには理学療法の実践に際する注意事項なども会得する。		
授業形態	講義	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	整形外科学とは？ 整形外科診断学	整形外科の起源 運動器疾患の診断学
2回	整形外科的治療法	保存療法 手術療法 理学療法士の役割
3回	軟部組織の損傷	皮膚損傷 筋・腱・靱帯損傷 熱傷概論 筋区画症候群
4回	骨関節の損傷 総論	骨折・脱臼・捻挫の総論
5回	上肢1 肩関節および上腕	肩甲帯の骨折、脱臼、不安定性、変性疾患、スポーツ障害
6回	上肢2 肘関節および前腕	肘周囲の骨折、脱臼、スポーツ障害 前腕骨骨折
7回	上肢3 手関節と手指	手関節部骨折、手指腱損傷、バネ指、指の変形性関節症 腱鞘炎
8回	下肢1 股関節および大腿	股関節周辺の骨折、股関節の疾患
9回	下肢2 膝関節および下腿	膝関節周辺の骨折、靱帯損傷、変形性関節症、アキレス腱断裂
10回	下肢3 足関節と足部	足関節周辺の骨折、脱臼、内反足、外反母趾
11回	脊椎脊髄1 総論	脊柱の構造と機能 頸椎捻挫
12回	脊椎脊髄2 脊髄損傷	脊髄損傷の急性期、慢性期 合併症管理
13回	脊椎脊髄3 頸髄損傷	頸髄損傷 上肢の機能 高位分類
14回	脊椎脊髄4 各種疾患	椎間板ヘルニア 変形性疾患 腰痛 脊柱管狭窄症 後縦靱帯骨化症
15回	脊椎脊髄5 湾曲異常、骨盤	側湾症 後弯症 骨盤の疾患

成績評価		受講上のルール・留意点	
------	--	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	整形外科学テキスト（改定第4版）	高橋 邦奏、芳賀 信彦 編	南江堂
参考書			
オフィスアワー	担当授業の前後		

理学療法学科 夜 間 部			
科 目	整形外科科学Ⅱ	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	星野雄一	学 年	2年生 前期
実績経験	資格	整形外科専門医 元脊椎脊髄外科指導医、元日整会認定リハビリテーション認定医	
	医師		

授業の位置づけ	整形外科は、骨・関節・筋肉・神経などにより構成される運動器の障害に対して、保存治療と手術を含む幅広い診療を担当している。整形外科科学Ⅱではリウマチや骨粗鬆症などの全身性疾患、四肢の末梢神経障害、ロコモティブシンドロームなどの予防的概念、さらにはスポーツ整形外科などの講義を行う。		
到達目標	外傷などの局所的障害以外の整形外科的疾患について学ぶ。先天異常、全身性疾患、加齢など退行変性による疾患、スポーツ障害などを理解する。また国民病であるロコモ やフレイルの概念を学ぶことにより、国民全体の健康増進を目指して、理学療法士として指導していくために必須な知識を会得する。		
授業形態	講義	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	慢性関節疾患	変形性関節症 痛風 血友病性関節症
2回	リウマチ性疾患 1	関節リウマチ
3回	リウマチ性疾患 2	悪性関節リウマチ 強直性脊椎炎 自己免疫疾患
4回	感染症	骨髄炎 化膿性関節炎 骨関節結核
5回	代謝・内分泌疾患	骨粗鬆症 副甲状腺・甲状腺機能障害
6回	ロコモ ティブシンドローム	ロコモ ・フレイル 運動器不安定症 医学会宣言2022
7回	骨・軟部腫瘍	骨肉腫 軟骨肉腫 軟部腫瘍
8回	末梢神経疾患 1	末梢神経機能評価法 上肢の末梢神経障害
9回	末梢神経障害 2	下肢の末梢神経障害 トンネル症候群 腕神経叢損傷
10回	脳性麻痺	原因 分類 評価
11回	筋ジストロフィー・骨系統疾患	筋ジストロフィー 骨形成不全症 骨軟骨無形成症
12回	骨壊死性疾患・骨端症・循環障害	無腐性骨壊死 骨端症 閉塞性動脈硬化症 深部静脈血栓症
13回	四肢切断	切断 四肢欠損 義肢 切断者へのメンタルサポート
14回	慢性疼痛疾患	複合性局所疼痛症候群 慢性腰痛 切断後の幻肢痛
15回	スポーツ整形外科	外傷、障害、パラスポーツ

成績評価		受講上のルール・留意点	
------	--	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	整形外科科学テキスト（改定第4版）	高橋 邦奏、芳賀 信彦 編	南江堂
参考書			
オフィスアワー			

科 目	神経内科学		単位・時間数	2単位 ・ 30時間
担当講師	斉藤史明／真先敏弘		学 年	2年生 前期
実績経験	資格：医師、神経内科専門医	神経内科専門医として大学病院や総合病院において神経内科疾患の診療を行ってきた。この経験を生かし基礎から最先端の医療まで幅広く講義を行う。		

授業の位置づけ	超高齢化社会をむかえた我が国においては脳血管障害や認知症などの神経疾患に遭遇する機会は大幅に増えている。一方、近年の神経疾患の診断は新たな画像診断や遺伝子診断技術の開発により大きな進歩を遂げた。また治療に関しても抗体医薬の導入から再生医療や遺伝子治療の臨床応用までも見据え、大きな変貌を遂げる過渡期にさしかかっている。しかしながらこれら神経疾患の診療において、今後もリハビリテーションが大きなウエイトを占めるであろう事は想像に難くない。この授業では指定教科書や最新情報を含むプリント資料、スライド教材、ビデオ教材などを用いてこれらの問題点を解説し、将来君たちが理学療法士となった時に臨床に生かせる講義を行う。		
到達目標	1. 神経系の構造、機能を説明できる。 2. 神経徴候の出現機序を理解し説明できる。 3. 神経疾患の原因、症状を説明できる。 4. 神経疾患の対処法、治療法を説明できる。		
授業形態	基本的に対面授業を行う予定だが遠隔授業となる可能性もある。		

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	神経内科学総論 1	神経内科学序論、神経学的診察・検査法
2回	神経内科学総論 2	運動麻痺と筋萎縮
3回	神経内科学総論 3	錐体外路障害、運動失調
4回	神経内科学総論 4	感覚障害
5回	神経内科学総論 5	意識障害、高次脳機能障害
6回	神経内科学総論 6	脳神経障害、構音・嚥下障害、めまい
7回	神経内科学各論 1	脳血管障害 1 ・脳梗塞
8回	神経内科学各論 2	脳血管障害 2 ・脳出血
9回	神経内科学各論 3	認知症
10回	神経内科学各論 4	パーキンソン病と他の不随意運動症
11回	神経内科学各論 5	筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症
12回	神経内科学各論 6	ニューロパチーとミエロパチー
13回	神経内科学各論 7	多発性硬化症、ギラン・バレー症候群
14回	神経内科学各論 8	筋ジストロフィーとその他の筋疾患
15回	神経内科学各論 9	その他の疾患

成績評価	筆記試験で行う。	受講上のルール・留意点	授業時間数の 3 分の 1 以上欠席した者には単位を与えない。授業中に復習のための小テストを行う事があるが、この結果は成績評価には関与しない。
------	----------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
必要があればフィードバックは全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 神経内科学 第5版	川平和美	医学書院
参考書	病気がみえる vol.7 脳・神経 第2版		MEDIC MEDIA
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

理学療法学科 夜間部			
科 目	精神医学	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	河邊 宗知	学 年	2年生 後期
実績経験	資格	実務経験 22年 作業療法士として、精神科病院、精神科訪問看護、発達支援センターにて臨床を行う。また作業療法士養成機関で教員を努めている。	
	作業療法士/公認心理師		

授業の位置づけ	理学療法の臨床においても、精神障害を持つ患者や、高齢期の患者は多く、基本的な精神医学の知識は必要であると思われる。また、理学療法士国家試験においても、問題数も多く必要な知識であるといえる。 1. 精神障害に対して、症状の特徴、経過、基本的知識を習得する。 2. 精神障害者を同じ社会で生きる人として、全人的に理解し、将来的にリハビリテーションを提供する臨床家としてかかわるために基本的知識を習得する		
到達目標	精神医学の歴史および現状について説明することが出来る 主要な精神疾患の症状について説明することが出来る 精神疾患の経過や治療、生活上の困難さについて説明できる		
授業形態	講義	併用授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	総論	精神障害と診断基準（従来の診断法と操作的診断法：ICD、DSM）、精神医学の歴史、脆弱性ストレスモデル
2回	総論	精神機能の障害と精神症状（意識、注意、知能、パーソナリティ、記憶、感情、自我障害、知覚障害、思考障害、病識）
3回	総論	てんかん（分類、症状）
4回	疾患論	依存症（アルコール、その他の物質使用障害、嗜癖行動障害）
5回	疾患論	認知症、高次脳機能障害
6回	疾患論	統合失調症①（主要な精神症状、精神症状の特徴）
7回	疾患論	統合失調症②（症状と生活障害、治療、リハビリテーション）
8回	疾患論	気分障害①（大うつ病）
9回	疾患論	気分障害②（双極性障害、その他の気分障害）
10回	疾患論	神経症性障害①（不安、強迫、ストレス関連障害、解離性障害）
11回	疾患論	神経症性障害②（身体表現性障害、その他の神経症性障害）生理的障害（摂食障害他）
12回	疾患論	パーソナリティ障害（パーソナリティ概説、ICD・DSMに基づく障害分類、治療・援助）
13回	疾患論	生理的障害（摂食障害、睡眠障害ほか）、行動の障害、性の障害
14回	疾患論	器質性精神障害（認知症ほか）
15回	総論	精神科リハビリテーション、コンサルテーション・リエゾン精神医学、多職種連携、精神専門療法、作業療法・理学療法との関連について

成績評価	定期試験80% 授業での課題、授業内での確認テスト20%	受講上のルール・留意点	授業内で適宜課題や知識確認テストを行うため、授業ごとにその内容の理解を深め、不明な点は質問をしていただきたい。
------	---------------------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
授業内容の理解を深めるため、授業内で課題の実施や、知識確認テストを行う。結果については、次回の授業で補足、フィードバックを行う予定。

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 精神医学第4版増補版	編集：上野武治	医学書院
参考書	授業毎の配布資料		
オフィスアワー	主として、授業内、授業前後の時間に質問を受け付ける。 必要に応じて、メールでの連絡をしていただきたい m-koube@nichireha.ac.jp		

科 目	小児科学	単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	江添 隆範	学 年	2年生 前期
実績経験	資格	昭和62年より、小児科医師として病院勤務。治療の経験を活かし、講義を行う。 日本小児科学会専門医	
	小児科医師		

授業の位置づけ	治療に理学療法、作業療法が重要な役割を果たす小児、思春期の疾患について講義形式で習得する。		
到達目標	小児の正常な発育、発達を知る。小児に特有な疾患を理解する。		
授業形態	講義	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	小児の特性、発達	発達、発育（正常）について、小児保健、小児によくみられる症状など
2回	遺伝学、新生児	臨床遺伝学について（染色体異常、遺伝子疾患） 新生児の特徴、低出生体重児、
3回	神経、筋疾患	脳奇形、てんかん、筋疾患（筋シストロフィ症、ミオパチー）
4回	神経、筋疾患	自閉スペクトラム症、AD/HDなどの発達障害
5回	心疾患、感染症	心疾患：先天性心疾患を中心に 感染症：小児期に多い感染症
6回	消化器疾患、内分泌疾患	小児の消化器疾患 ホルモンの異常による小児疾患
7回	血液・腫瘍疾患、アレルギー疾患	血液疾患：貧血、白血病、血友病 アレルギー疾患：ぜん息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー
8回	腎疾患、重症心身障害	腎疾患：腎炎、ネフローゼなど 重症心身障害の定義、身体的特徴と治療

成績評価	筆記試験100%	受講上のルール・留意点	パワーポイントを用いて講義。資料配布あり。
------	----------	-------------	-----------------------

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	PT・OTの小児科学の最新版		医学書院
参考書			
オフィスアワー	授業後の休憩時間		

		理学療法学科	夜 間 部
科 目	リハビリテーション医学概論Ⅱ	単位・時間数	2単位・ 30時間
担当講師	高瀬 慎輔 /石川 秀志	学 年	2年生 後期
実績経験	資格	高瀬：理学療法士として、回復期病棟、急性期病院、デイサービス、障害者福祉施設、介護予防事業、訪問リハ、教育機関に携わった実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士（高瀬） 文学博士・キャリアコンサルタント（石川）		

授業の位置づけ	リハビリテーション医学基礎知識修得。更には、リハビリテーションと深い関連を有する福祉・医療・保健等について知識の修得。		
到達目標	リハビリテーションの各論を知る前の概論を知り、医療福祉保健の知識習得さらに、理学療法士のかかわりについて理解する		
授業形態	講義・演習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	リハビリテーションの定義	リハビリテーションの定義について復習する
2回	リハビリテーションにおけるPTの役割	ケース1
3回		ケース2
4回		ケース3
5回	リハビリテーションにおけるPTの役割	ケース4
6回		ケース5
7回		ケース6
8回	保健・福祉分野	社会福祉とは 憲法の13条・25条を考えてみる
9回		社会福祉の歴史 日本の社会福祉の歴史
10回		社会福祉の歴史 ヨーロッパにおける社会福祉の歴史
11回		社会福祉法制と行財政
12回		最低生活保障と生活保護制度
13回		児童家庭福祉の課題
14回		障害者総合支援法 障がい者の自立と福祉
15回		高齢者の生活と福祉

成績評価	高瀬：レポートにて評価（50%） 石川：	受講上のルール・留意点	筆記用具ノートなどを準備して必要に応じて記録などをしましょう。
------	-------------------------	-------------	---------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
講義時間内もしくは講義後に対応

	書名	著書名	出版社名
教科書（高瀬）	なし（資料配布します）		
教科書			
オフィスアワー	担当授業の前後		

科 目	理学療法研究法		単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	高林 礼子		学 年	2年生 前期
実績経験	資格	実務経験27年（総合病院・老人福祉施設・障害者施設・訪問等）の経験を踏まえて講義を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	リハビリテーションや理学療法における研究の意義を考え，研究に必要な基本的な知識や方法論を習得する．		
到達目標	研究の目的，研究様式，研究の流れ，方法について学ぶ．研究の倫理について学ぶ．文献の探し方，文献レビューの方法について学ぶ．また，模擬データを用いて，統計ツールにて検定を行う． 1．研究の一連の過程について説明することが出来る 2．各研究デザインの相違について説明することが出来る 3．研究倫理の重要性について説明することが出来る 4．文献レビューの重要性について説明し、文献検索を行うことが出来る 5．統計学の基本的事項（記述統計と推測統計、尺度、代表値、仮説検定等）について説明できる 6．統計ツールの基本的操作および統計ツールを用いて、基本的な統計処理を行うことが出来る		
授業形態	講義・演習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	研究の進め方	研究とは？ 研究デザインの基礎知識
2回	研究データの集め方	研究データとは 研究データの集め方
3回	文献検索	文献を探す方法 【課題】課題：文献検索演習（医中誌WEB等を用いて）
4回	研究計画書を作成	研究計画書の作成
5回	調査研究/質的研究	アンケート調査（質問項目，選択肢の作成）
6回	データの分析法	量的研究のデータ分析
7回	データの分析法	質的研究のデータ分析
8回	発表に向けて	まとめ パワポや論文のまとめ方

成績評価	レポート	受講上のルール・留意点	データの分析の際には、出来たらエクセルの入ったP Cを準備
------	------	-------------	-------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
授業内容の理解を深めるため、必要に応じて、

	書名	著書名	出版社名
教科書	配布資料		
参考書	理学療法研究法	編著：対馬栄輝	石躍出版株式会社
オフィスアワー	授業前後 メールr-takabayashi@nichireha.ac.jp		

理学療法学科 夜間部			
科目	検査測定法Ⅲ（神経・中枢）	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	鈴木・畠山	学 年	2年生 前期
実績経験	資格	畠山：1985理学療法士免許取得。平成9年より日リハ勤務。 鈴木：実務経験38年理学療法士として、一般病院、総合、教育機関に常勤勤務、非常勤として市・区の保健センターなど急性期から維持期にかけての経験から抗議する。	
	畠山：理学療法士、鍼師・灸師 鈴木：理学療法士		

授業の位置づけ	各病態の概要を踏まえた運動療法の特徴と運動療法の種類を学習する。		
到達目標	各病態を理解し基本的な運動療法を学習する。		
授業形態	講義・実習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	反射検査①	反射の定義・種類・深部腱反射
2回	反射検査②	深部腱反射・表在反射
3回	反射検査③	表在反射・病的反射
4回	高次脳検査①	失認・失行・失語
5回	高次脳検査②	認知症・注意障害他
6回	片麻痺運動機能検査①	共同運動と連合反応, Br - test (U/E)
7回	片麻痺運動機能検査②	Br - test (Finger)
8回	片麻痺運動機能検査③	Br - test (L/E)
9回	脳神経検査①	嗅神経・視神経・動眼神経・滑車神経・外転神経
10回	脳神経検査②	三叉神経・顔面神経
11回	脳神経検査③	内耳神経・舌咽神経・迷走神経・副神経・舌下神経
12回	筋緊張検査①	筋トーンスの基礎・異常、被動性検査・懸振性検査
13回	筋緊張検査②	筋硬直の検査、伸展性の検査、姿勢筋トーンスの検査
14回	協調検査①	協調性障害、運動失調検査（姿勢・歩行・ADLの観察、四肢の運動失調検査）
15回	協調検査②	運動失調検査（共同運動不能・足底障害・返還運動障害）その他の検査

成績評価	1) 筆記試験50%、提出物及び小テスト、10%、実技40% 欠格要件（授業時間1/3以上の結席者には単位を与えない）	受講上のルール・留意点	他者に対する礼儀と配慮、必要であれば補講又は実技練習を設ける。疾患の概要理解のために文献の抄読、およびグループ発表。
------	--	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
メールでの添付にて提出、添削によるフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	理学療法評価学書いて第6版 ベットサイドの神経の診方改訂18班	松澤 正、江口勝彦 著 田 崎 義昭、斎藤 佳男 著	金原出版 南山堂
参考書			
オフィスアワー	担当授業の前後		

理学療法 学科 夜間部				
科 目	検査測定法Ⅳ【整形・動作】		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	内山結城 畠山敦		学 年	2年生 前期
実績経験	資格	畠山敦：1985理学療法士免許取得。主として、病院施設を開設、平成9年、鍼灸資格取得、同年より日本リハビリテーション専門学校勤務となる。 内山 結城：実務経験17年。国際PNF協会認定セラピスト（IPNFA level5 修了） 理学療法士として、回復期病棟・外来に勤務した後に責任者として急性期病院に勤務。現在はスポーツトレーナー（競泳等）としても選手のケアやパフォーマンス向上に携わっている。		
	理学療法士			
授業の位置づけ	整形外科的テストとは「骨、関節、筋、神経、血管などの運動器の損傷やその部位を特定するために行われる徒手の検査法」の1つである。我が国では理学的検査法、整形外科徒手検査法、運動器徒手検査法、骨関節系検査法、運動機能検査法などと呼ばれることもある。整形外科医師も整形外科テストを行うが、医師の場合は診断に利用する。理学療法士の場合は、「治療のための機能評価」及び「選択した理学療法の効果検証」として整形外科的テストを使用すること側面が多い。端的に言えば「整形外科領域において痛みや、身体不調の根本的な原因を追究する検査」である。 学生は解剖学・生理学・運動学といった「専門基礎」を基盤とした上で、関節可動域測定や徒手筋力検査、その他の評価と合わせて演習から整形外科テストを学び、より正確に患者の状態を把握するために評価・技術を身につける。 本授業では「講義」、「実技（グループワーク含む）」で構成される。			
到達目標	1. 解剖学・生理学・運動学の知識から整形外科テストで何が分かるのか説明することができる。 2. 他の検査結果と合わせて考え、患者の状態を理解することができる。 3. 疾患に応じて必要な整形外科的テストを選択し実施できる。			
授業形態	講義・演習		対面授業	
授業計画				
回数	項目	講義内容		
1回	頸部（1）	演習：頸部の整形外科テストを実施①		
2回	頸部（2）	演習：頸部の整形外科テストを実施②		
3回	肩関節（1）	演習：肩関節の整形外科テストを実施①		
4回	肩関節（2）	演習：肩関節の整形外科テストを実施②		
5回	肘・手関節（1）	演習：肘・手関節の整形外科テストを実施①		
6回	肘・手関節（2）	演習：肘・手関節の整形外科テストを実施②		
7回	胸椎・腰椎（1）	演習：胸椎・腰椎の整形外科テストを実施①		
8回	胸椎・腰椎（2）	演習：胸椎・腰椎の整形外科テストを実施②		
9回	骨盤・股関節（1）	演習：骨盤・股関節の整形外科テストを実施①		
10回	骨盤・股関節（2）	演習：骨盤・股関節の整形外科テストを実施②		
11回	膝・足関節（1）	演習：膝・足関節の整形外科テストを実施①		
12回	膝・足関節（2）	演習：膝・足関節の整形外科テストを実施②		
13回	ケーススタディー（1）			
14回	ケーススタディー（2）			
15回	まとめ	整形外科的評価の総復習		
成績評価	発表 20% 小テスト30% 実技試験50% 合計 1 0 0 %	受講上のルール・留意点	1. 授業開始時あるいは終盤に小テストを行う。 2. 実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。その際に臨床業務に影響のある身だしなみはしないこと（アクセサリを外す、長い髪は束ねる等、その他必要に応じてアルコール消毒するなど感染予防に努めること）。 3. 授業展開 小テスト①⇒グループごとにテーマを選択⇒メンバー間で担当を選択⇒調べる⇒発表⇒小テスト②⇒振り返り	
課題やレポートに関するフィードバック				
実技演習に関しては、机間巡回中に行う。またリフレクションシートには、質問欄を設けているので、その記載に合わせてフィードバックを行う。疑問・質問に関しては、メールで随時対応、時間外にも対応する。				
	書名	著書名	出版社名	
教科書	病態動画から学ぶ 臨床整形外科テスト	吉田一也、隅元庸夫	HUMAN PRESS	
参考書	写真で学ぶ 整形外科テスト法 増補改訂新版	ジョーゼフ・J・シプリアーノ	医道の日本社	
オフィスアワー	研修日（木曜日）、午後から出勤（教員室滞在） メールでの連絡は随時 y-uchiyama@nichireha.ac.jp	※その他、理学療法評価のテキスト参照		

理学療法学科 夜間部			
科 目	検査測定法演習 I	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	吉葉則和, 下村 周平, 高橋 豊	学 年	2年生 前期
実績経験	資格	吉葉：実務経験24年理学療法士として総合病院、クリニック、維持期を経験後、教育機関にて学生教育にかかわる。経験談も含め講義を行う。 下村：実務経験16年（病院、通所、訪問、予防事業等）の経験を踏まえ、実例を交えながら講義を行う。 高橋：実務経験12年 介護老人保健施設・訪問リハビリテーション・デイケア・デイサービスにて勤務。実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	理学療法士が行う基本的な検査技術のうち、1年時に習得した技術を、OSCEを活用し磨きをかける。		
到達目標	患者を想定し一連の流れで検査が実施できる。		
授業形態	講義・実習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	問診、血圧脈拍測定	実施内容確認、練習
2回	問診、血圧脈拍測定	OSCE実施、フィードバック
3回	肢長・周径	肢長・周径練習
4回	肢長・周径	OSCE実施、フィードバック
5回	関節可動域測定上肢	上肢（肩・肘・前腕・手関節）計測練習
6回	関節可動域測定上肢	OSCE実施、フィードバック
7回	関節可動域測定下肢	下肢（股・膝・足関節）計測練習
8回	関節可動域測定下肢	OSCE実施、フィードバック
9回	MMT上肢	上肢（肩・肘・前腕・手関節）計測練習
10回	MMT上肢	OSCE実施、フィードバック
11回	MMT下肢	下肢（股・膝・足関節）計測練習
12回	MMT下肢	OSCE実施、フィードバック
13回	MMT体幹	体幹 計測練習
14回	MMT体幹	OSCE実施、フィードバック
15回	総復習	個人練習

成績評価	レポート100%	受講上のルール・留意点	授業中は集中して、クラスメイト相手でも真摯な態度でのぞむこと。
------	----------	-------------	---------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
全体へのフィードバックを実施するとともに、必要に応じ個別にも行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	各検査測定法の授業で使用した教科書		
オフィスアワー	吉葉：授業前後及びメール（n-yoshiba@nichireha.ac.jp） 下村：授業前後及びメール（s-shimomura@nichireha.ac.jp） 高橋：授業前後及びメール（y-takahashi@nichireha.ac.jp）		

		理学療法学科	夜 間 部
科 目	検査測定法演習Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	畠山敦, 鈴木雅男, 内山結城	学 年	2年生 後期
実績経験	資格	畠山敦：1985理学療法士免許習得8年目となる。平成9年、疼痛治療のため鍼灸の夜学を卒業、同年より日本リハビリテーション専門学校勤務となる 鈴木雅男 実務経験 38年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。 内山 結城：実務経験17年。国際PNF協会認定セラピスト（IPNFA level5 修了） 理学療法士として、回復期病棟・外来に勤務した後に責任者として急性期病院に勤務。現在はスポーツトレーナー（競泳等）としても選手のケアやパフォーマンス向上に携わっている。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	本授業は2年生で学ぶ理学療法評価・検査法について、検査の目的や意義を理解し、適切に実践し臨床の場で活用できるように主にグループで再学習する授業である。 今まで学習した各検査法について、目的、方法、結果の解釈を確認しておくこと。 授業方法は、グループを主体とした「実技」「演習」を行う。 各検査において、測定練習を行い、次の授業でOSCE（objective structured clinical examination:客観的臨床能力試験）を実施し臨床能力を養う。		
到達目標	1．各検査法について目的・意義が説明できる。 2．各検査法について模擬患者を対象に実践できる。 3．各検査法の結果を解釈、統合できる。		
授業形態	演習	対面授業	

授業計画			
回数	項目	講義内容	
1回	疼痛、整形外科検査①	脊柱、下肢、上肢 測定練習	
2回	疼痛、整形外科検査②	整形外科検査 OSCE	
3回	感覚検査①	表在・深部感覚 測定練習	
4回	感覚検査②	表在感覚検査 OSCE	
5回	感覚検査③	深部感覚検査 OSCE	
6回	反射検査①	深部腱反射、病的反射 測定練習	
7回	反射検査②	深部腱反射、病的反射 OSCE	
8回	中枢神経系検査①	片麻痺機能検査、筋トーンス検査、SIAS 測定練習	
9回	中枢神経系検査②	片麻痺機能検査 OSCE	
10回	中枢神経系検査③	SIAS OSCE	
11回	中枢神経系検査④	脳神経系検査 測定練習	
12回	中枢神経系検査⑤	脳神経系検査 OSCE	
13回	中枢神経系検査⑥	協調性検査 測定練習	
14回	中枢神経系検査⑦	協調性検査 OSCE	
15回	中枢神経系検査⑧	バランス検査 測定練習 OSCE	
成績評価	レポート課題100%	受講上のルール・留意点	服装：上下ジャージ（短パン、Tシャツも可）、もしくは上下白衣でマスク着用、アクセサリー等貴金属を外す、髭は剃り、長い髪は束ねる スマートフォン：授業中は禁止（鞆に入れておく） 授業前準備：PC、プロジェクターにPC画面が映し出され、マイクはスピーカーから音が出る状態にしておく（授業前に内山にプリント等確認にすること） 授業に向かう姿勢：授業開始の号令から出席確認の間は私語厳禁（終礼時も同様）授業を妨げるような不真面目反抗的な態度は慎むこと
課題やレポートに関するフィードバック			
実技に関するフィードバックは実技練習中、練習の後、グループまたは全体に対して適宜実施する。			

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし		
参考書			
オフィスアワー	担当授業の前後		

理学療法学科 夜間部			
科目	総合演習（PBL）Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	鈴木・畠山	学 年	2年生 後期
実績経験	資格	畠山：1985理学療法士免許取得。平成9年より日リハ勤務。 鈴木：実務経験38年理学療法士として、一般病院、総合、教育機関に常勤勤務、非常勤として市・区の保健センターなど急性期から維持期にかけての経験から抗議する。	
	畠山：理学療法士、鍼師・灸師 鈴木：理学療法士		

授業の位置づけ	症例情報を基に今まで学んだ医学的基礎知識や理学療法評価の理解を深め、グループディスカッションや実技を通して自ら学んでいく。 患者の健康問題を見つけた後、全人的に理解する。人（ひと）を身体・心理・社会的立場など、あらゆる角度から理解することは患者中心の考え方の根幹となる。チーム内の役割を明確にし、自ら積極的に行動し、症例から患者の抱える問題の解決に向けて取り組む。最後は、症例情報からの学びをまとめ、グループ発表を行う。これらの過程で理学療法士の臨床思考を身につけていくことを目的とする。		
到達目標	1．症例情報から必要となる評価項目を選択できる。 2．評価情報から問題点をICFにまとめ、ゴール設定、プログラムの立案ができる。 3．1年次、2年次で学んだことを通して、患者の身体・心理・社会生活を総合的に理解する。		
授業形態	講義・演習・実習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	授業の目的と実施内容について
2回	症例情報の整理と理解	症例情報を整理し、全体像をまとめる
3回	症例情報の整理と理解	症例情報を整理し、全体像をまとめる
4回	症例情報の整理と理解	症例情報を整理し、全体像をまとめる
5回	理学療法評価	必要な理学療法評価を選択
6回	理学療法評価	理学療法評価 実践
7回	理学療法評価	理学療法評価 実践
8回	理学療法評価	理学療法評価 実践
9回	症例情報のまとめ	問題点をICFにまとめる
10回	症例情報のまとめ	評価結果からゴール設定、プログラム立案を行う
11回	症例情報のまとめ	評価結果からゴール設定、プログラム立案を行う
12回	症例情報のまとめ	発表準備
13回	症例発表	まとめた内容を発表
14回	症例発表	まとめた内容を発表
15回	症例解説、フィードバック	症例について解説、演習についてよかった点や今後の課題を整理する

成績評価	課題提出：100%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 グループワーク課題は積極的に行う。
------	-----------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー			

科 目	運動療法学Ⅱ		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	畠山・村井		学 年	2年生 後期
実績経験	資格	畠山：1985理学療法士免許取得。リハ施設の認可等に当たる。平成9年、鍼灸資格取得、同年より日本リハビリテーション専門学校勤務となる。 村井：実務経験30年。1992年より中枢疾患を中心とした病院で勤務。2005年に鍼師・灸師・あんまマッサージ指圧師を取得。その後教育機関で専任として勤務		
	畠山：理学療法士、鍼師・灸師 村井：理学療法士、鍼師・灸師・ 按摩マッサージ師 吉葉：理学療法士			

授業の位置づけ	各病態の概要を踏まえた運動療法の特徴と運動療法の種類を学習する。		
到達目標	各病態を理解し基本的な運動療法を学習する。		
授業形態	講義・実習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	中枢性運動麻痺	中枢性運動麻痺の病態 分類
2回		中枢性運動麻痺の病態 症状
3回	中枢性運動麻痺実技	中枢性運動麻痺の運動療法 痙縮に対する理学療法
4回		中枢性運動麻痺の運動療法 各種の治療手技
5回	バランス障害	力学的平衡 (構造的平衡)・・・静止の意味 Equilibrium Reaction
6回		機能的平衡
7回	協調性運動障害	パーキンソン氏病 Hesitation
8回		失調症
9回	関節トレーニング	協調運動障害の病態
10回	機能的平衡	協調性運動障害の運動療法
11回	高齢者	高齢者の特徴と運動療法
12回		高齢者の運動療法
13回	末梢神経性運動麻痺	末梢神経性運動麻痺の病態
14回		末梢神経性運動麻痺の運動療法
15回	まとめ	

成績評価	1) 筆記試験80%、 提出物及び小テスト、20% 2) 欠格要件（授業時間1/3以上の欠席者には単位を与えない）	受講上のルール・留意点	他者に対する礼儀と配慮、必要であれば補講又は実技練習を設ける。疾患の概要理解のために文献の抄読、およびグループ発表。
------	---	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
メールでの添付にて提出、添削によるフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	運動療法学 障害別アプローチの理論と実際 第2版	市橋則明	文光堂
参考書			
オフィスアワー	担当授業の前後		

		理学療法学科	夜 間 部
科 目	物理療法学	単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	篠田良平	学 年	2年生 前期
実績経験	資格	実務経験30年 理学療法士として回復期病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。実務経験を活かし実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	PT（Physical Therapist）の語源となった学問である。物理エネルギーを人体に作用させた生理的反応を治療に用いる。代表的な治療として温熱、寒冷、電気、光線、牽引等があるが、それぞれの属性により使い方があり、それを誤ると事故にもつながるので明確に禁忌が提示されている。基本的な使用法と禁忌を学びながら科学的実験の要素を取り入れ、物理エネルギーの特性を目で確認して理解を深めていく。授業方法はプリント・パワーポイントを主とした講義形式。治療機器の体験演習では機器を使用する場面を見せながら、実際に自分でも体験する。		
到達目標	○物理的エネルギーの種類と人体に及ぼす効果を理解する。 ○各治療法の禁忌を理解し覚える。 ○各治療法を自分で体験する。		
授業形態	講義・演習	併用授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	概論・温熱療法	物理療法の基礎・原理 ホットパック・パラフィン
2回	温熱療法	超短波・マイクロ波・超音波
3回	光線・寒冷療法	赤外線・紫外線・レーザー・アイスパック
4回	寒冷・水治療法	アイスマッサージ・過流浴他
5回	電気療法	基礎・低周波・干渉波・TES
6回	電気療法	FES・BDS・フィードバック
7回	牽引療法・CPM等	頸椎牽引・腰椎牽引・CPM・その他物理療法
8回	まとめ	

成績評価	定期試験：筆記試験100%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。
------	---------------	-------------	--------------------

課題やレポートに関するフィードバック
全体にフィードバックを行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	物理療法学	吉田英樹	メジカルビュー
参考書			
オフィスアワー	担当授業の前後		

理学療法学科 夜間部			
科 目	日常生活活動学 I	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	篠田 良平	学 年	2年生
実績経験	資格	篠田良平：実務経験30年 理学療法士として、回復期病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。実務経験を活かし実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	この授業では、日常生活動作（以下ADL）の知識と技術の基礎を学習する。この教科の基本概念となる生活の質（QOL）について理解し、関連した知識を学び、寝返りや歩行・炊事や買い物のような日常生活を医療的視点から見つめ直す。日常生活を論理的・現実的に分類するために国際生活機能分類（ICF）を学ぶ。日常生活の変化を評価し理学療法に反映させるためのツールとしてバーセルインデックス（BI）・機能的自立度評価表（FIM）を学ぶ。見学実習や臨床実習で患者様と接する際の基本的技術として介護法を学ぶ。 授業方法はプリント・パワーポイントを主とした講義形式で行う。車椅子駆動と杖歩行に関して患者様の状態を体験するための演習を行う。実技では基本的に2人1組で杖歩行の行い方や介護法を学ぶ。		
到達目標	○リハビリテーションにおけるADLの関わりを理解している ○ICF分類とBI・FIMの採点を行える ○車椅子駆動、杖歩行や介助に関して相手に説明しながら行える		
授業形態	講義・演習	併用授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	ADLと概念	ADLの概念、範囲、分類
2回	ADLと障がい	障がいの定義ICIDHとICF
3回		ICFの特徴と分類
4回	ADLとQOL	QOLの概念、評価
5回		障がい受容
6回	ADL評価	ADL評価の概論、目的、役割
7回		Barthel Indexの特徴・配点
8回		FIMの特徴・判定基準
9回		FIMの特徴・判定基準
10回		FIMの評価演習
11回	実技演習	基本動作介助法
12回		基本動作介助法
13回	歩行補助具・車椅子	歩行補助具・車椅子の分類と使用方法、指導法、介助法
14回	臨床体験	杖歩行と車椅子駆動の体験演習
15回	総括	授業まとめ

成績評価	筆記試験 100%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 演習（実技）では動きやすい服装を準備する。 グループワークでは積極的に参加する。
------	-----------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは授業の中で全体に行い、授業終了後は個別対応。

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学 第6版	鶴見隆正、隆島研吾編集	医学書院
参考書	日常生活活動 第2版	千住秀明監修	神陵文庫
オフィスアワー	担当授業の前後 メールでの連絡は随時 (r-shinoda@nichireha.ac.jp)		

科目	疾患別理学療法Ⅰ-A	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	米村 豊	学 年	2年生 後期
実績経験	資格	2008年から整形外科領域で培った知識と技術を提供するとともに、この経験を活かし学生自身で考え行動できる内容の授業を提供する。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	整形外科疾患の理学療法評価・運動療法の知識・技術の習得。		
到達目標	整形外科疾患における理学療法評価・運動療法を考察、説明、実践できる。		
授業形態	対面を基本とする		

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	肩関節疾患	肩関節周囲炎、腱板断裂などの病態と障害像を学ぶ。 肩関節疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。
2回		
3回		
4回		
5回	肘・手関節疾患	肘・手関節疾患の病態と障害像および理学療法評価・治療法を学ぶ。
6回	頸部疾患	頸椎症、後縦靱帯骨化症などの病態と障害像を学ぶ。 頸部疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。
7回		
8回		
9回	胸椎・胸郭疾患	胸椎側弯症、後弯症などの病態と障害像を学ぶ。 胸椎・胸郭疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。
10回		
11回	腰部疾患疾患	腰椎椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄症などの病態と障害像を学ぶ。 腰部疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。
12回		
13回		
14回		
15回	脊髄損傷	脊髄損傷の病態と障害像、および理学療法評価・治療法を学ぶ。

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	教科書のほか、配布資料を使用 解剖学・運動学の理解を深めておくこと
------	------	-------------	--------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック	
適宜	

	書名	著書名	出版社名
教科書	運動器の運動療法	小柳磨毅ほか	羊土社
参考書			
オフィスアワー	なし		

理学療法学科 夜 間 部			
科 目	疾患別理学療法Ⅲ-B	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	篠田良平 鈴木雅男	学 年	2年生
実績経験	資格	篠田良平 実務経験30年 理学療法士として、回復期病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。実務経験を活かし実例を交えながら講義を行う。 鈴木雅男：実務経験37年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設にて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	「難病」と呼ばれる神経・筋疾患の症例は、臨床の現場でも担当する機会が大変多くあります。原因は様々で、まだ解明されていない疾患も大変多く存在します。数ある神経・筋疾患の中でも、臨床の現場で比較的多く見られる疾患にフォーカスし、病態理解、リハビリテーション評価と治療プログラムについて講義をします。 突如身近に「死」が迫ったり、今後元の生活に戻れなかったり、対象となる方の精神的な落ち込みは想像を絶する場面が多くあります。骨折などのリハビリテーションとは違い、明るい未来が約束できない、思い描けない難病を患った方に対して、どのようなアプローチをしたら良いのか。現場で経験したリアルな話を踏まえて、「疾患」への科学的な側面でのアプローチと、「人間」への精神心理的なアプローチ方法を学び、臨床の現場に役立てていけるような講義を行います。		
到達目標	疾患の特徴を理解したうえで神経・筋疾患の理学療法について学習し、各疾患における評価・治療プログラム立案を実施できるようになる。		
授業形態	講義	対面と遠隔の併用授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	多発性硬化症	神経筋疾患の概念、多発性硬化症の多発性硬化症の原因と病態理解
2回	多発性硬化症	多発性硬化症の評価法、症例検討
3回	多発性硬化症	多発性硬化症の治療プログラム、症例検討
4回	ギランバレー症候群	ギランバレー症候群の原因と病態理解
5回	ギランバレー症候群	ギランバレー症候群の評価法、症例検討
6回	ギランバレー症候群	ギランバレー症候群の治療プログラム、症例検討
7回	重症筋無力症	重症筋無力症の原因と病態理解
8回	重症筋無力症	重症筋無力症の評価法、症例検討
9回	重症筋無力症	重症筋無力症の治療プログラム、症例検討
10回	多発性筋炎・皮膚炎	多発性筋炎・皮膚筋炎の原因と病態理解
11回	多発性筋炎・皮膚炎	多発性筋炎・皮膚筋炎の評価法、症例検討
12回	多発性筋炎・皮膚炎	多発性筋炎・皮膚筋炎の治療プログラム、症例検討
13回	多発性筋炎・皮膚炎	多発性筋炎・皮膚筋炎の症例検討 発表
14回	筋ジストロフィー	筋ジストロフィーの原因と病態理解
15回	筋ジストロフィー	筋ジストロフィーの評価法、治療プログラム、症例検討

成績評価	筆記試験（100%）	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。
------	------------	-------------	--------------------

課題やレポートに関するフィードバック
都度、全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	病気がみえる vol.7 脳・神経 第2版	医療情報科学研究所	メディックメディア
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科 目	理学療法技術論Ⅲ		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	畠山・村井		学 年	2年生 後期
実績経験	資格	畠山：1985理学療法士免許取得。リハ施設の認可等に当たる。平成9年、鍼灸資格取得、同年より日本リハビリテーション専門学校勤務となる。 村井：実務経験30年。1992年より中枢疾患を中心とした病院で勤務。2005年に鍼師・灸師・あんまマッサージ指圧師を取得。その後教育機関で専任として勤務		
	畠山：理学療法士、鍼師・灸師 村井：理学療法士、鍼師・灸師・按摩マッサージ師			

授業の位置づけ	軟部組織系のインジケーターは痛みのコントロール。分節間の立ち直り反応を含めた張力としての筋緊張及び筋膜の関係を疼痛の制御を通じて、具体的に運動の変換を追求する。姿勢分析、運動分析を含めた動作分析の中で、仮説立証作業の一環として軟部組織への治療手技を学ぶ。		
到達目標			
授業形態	講義・演習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	筋調整 (MTA)	MTA総論・コースオリエンテーション
2回		痛みの評価（原因となる筋の探し方）
3回		基本手技Ⅰ
4回		基本手技Ⅱ
5回		上肢の治療
6回		下肢の治療
7回	筋膜リリース	概論
8回		クロスハンドテクニック
9回		腰仙減圧Ⅰ・Ⅱ フォースクロジャ-、フォームクロジャ-
10回		横断面リリースと分節
11回		後頭課リリース、プルテクニック（U/E・L/E）
12回		体幹の治療
13回	神経モビライゼーション	U/E 正中、橈骨、尺骨神経
14回	神経モビライゼーション	L/E SLUMP test
15回	テーピング	トリガーポイントとスパイラルテープ、キネシオテープ

成績評価	レポート課題	受講上のルール・留意点	他者に対する礼儀と配慮、必要であれば補講又は実技練習を設ける
------	--------	-------------	--------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
メールでの添付にて提出、添削によるフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	妹尾チューニングアプローチ入門	高田 治実	協同医書出版
参考書			
オフィスアワー	担当授業の前後		

科 目	理学療法技術論Ⅳ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	水口 健一	学 年	2年生 後期
実績経験	資格	現在も病院勤務にて、治療経験を活かした授業を行っていきたい	
	理学療法士		

授業の位置づけ	臨牀セミナーの一環として、臨床的に使われるPNFの手技について実技を中心に理解する		
到達目標	運動療法について P N F の基本的な手技と基本動作訓練、歩行訓練 を理解する		
授業形態	講義及び演習	対面	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	実技演習①	総論 運動療法の手技であるPNFについて
2回	実技演習②	肩甲骨の基礎パターン
3回	実技演習③	骨盤の基礎パターン
4回	実技演習④	上肢の基礎パターン
5回	実技演習⑤	上肢の基礎パターン
6回	実技練習⑥	下肢の基礎パターン
7回	実技演習⑦	下肢の基礎パターン
8回	実技演習⑧	頸部体幹のパターン
9回	実技演習⑨	特殊テクニック
10回	実技演習⑩	特殊テクニック
11回	実技演習⑪	基本動作訓練 マット動作
12回	実技演習⑫	基本動作訓練 マット動作
13回	実技演習⑬	歩行訓練でのガイド
14回	実技演習⑭	歩行訓練でのガイド
15回	実技演習⑮	呼吸練習

成績評価	筆記試験または筆記と実技試験	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には単位を与えない
------	----------------	-------------	------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	P N F ハンドブック 柳澤健 他訳 丸善出版(株)		
参考書	PNFコンセプト 監訳 市川繁之 ガイアブックス		
オフィスアワー			

科目	臨床見学実習Ⅱ	単位・時間数	1単位・45時間
担当講師	理学療法学科教員	学年	2年生 後期
実績経験	資格	総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・訪問・ディサービス・保健所・教育機関に従事しています。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	臨床見学実習Ⅱでは、1年次・前期科目で学習したリハビリテーションの役割、理学療法士の仕事内容、について実際に理学療法士の下で考え方や治療法などを実習する。 基礎医学・検査法を学んで理学療法士の施設での役割や仕事内容を見学することにより、自身の将来像を思い描き、どのような理学療法士を目指すのか目標を立てる3年次につなげる。 臨床見学実習Ⅱでは主に医療機関、介護福祉施設や通所介護・訪問リハなどの見学実習となる。		
到達目標	臨床現場では、実習生であっても礼節や態度、挨拶や身だしなみ等に気を付け、社会人として常識のある行動・態度で臨むことが求められる。そのため、普段から医療人として相応しい接遇・態度・行動に気を付け普段の生活から実践することが求められる。前期の授業から臨床見学実習に出るための学習を行い、理学療法士の業務内容、医療者としての考え方などを復習したうえで実習に臨むこと。 1. 臨床現場の理学療法士の役割、具体的な仕事内容を説明できる。 2. 病院・介護・福祉現場で働く専門職としての心構えを理解し、説明できる。 3. この見学から何を得て、今後何に取り組むべきかを明確にし、説明できる。 4. 患者・利用者とのコミュニケーションを通じて、理学療法士に求められるものを学ぶ。		
授業形態	実習		

授業計画：実習前・臨床実習・実習後の学習上の注意点			
実習前 ①実習の実施方法を確認し、効果的な実習を実施できるように準備する。 ②各授業の教科書や講義資料のポイントを実習前に整理し、確認すること。 ③コミュニケーション技能、実技練習を入念に実施し、実習に備えること。 見学実習 ①臨床現場では理学療法分野だけでなく、多職種連携を常に思い浮かべて、広範囲の知識と技術を体系的に学んでいく。 ②臨床現場では積極的に様々なことを体験、見学するように努めること。 ③習得した知識は毎日書類（ポートフォリオ）として記録すること。 実習後 ①実習後発表では、実習中に学んだ点を整理し、発表すること。 ②面談後は成果物を書類にまとめ、提出すること。			

成績評価	実習地評価、実習後発表をもとに総合的に判断する。	受講上のルール・留意点	臨床実習地での遅刻・早退・欠席は認めない。 実習指導者に対し報告・連絡・相談は必ず行う。 感染対策に対し、施設の規則に準じて行動する。
------	--------------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
実習地での課題やレポートのフィードバックは実習地で実施する。 実習終了後、担当教員からもフィードバックを実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし	学校配布資料	
参考書			
オフィスアワー	実習担当者・担任と連絡を取る		

理学療法学科 夜 間 部			
科 目	臨床検査測定実習	単位・時間数	1単位・45時間
担当講師	理学療法学科教員	学 年	2年生 後期
実績経験	資格	総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・訪問・ディサービス・保健所・教育機関は大学・大学院などに従事していました。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	臨床見学Ⅰで学んできたことを踏まえて、医療人としての礼節・態度・挨拶や身だしなみ等に気を付け、社会人として常識のある態度で臨むことが必要です。社会人として、日常生活から医療人として相応しい接遇・態度・行動を考え実践することが必要となる。また、検査測定実習では有意義な実習を送るために基礎となる1年次・2年次で学んだ科目をしっかりと復習して実習に臨むことが必要になる。また、臨床において理学療法士が行っている検査・測定の考え方などを復習したうえで実習に臨むこと。 理学療法評価学および診断学で学んだ理学療法評価・検査測定法とその裏付けとなる運動学・解剖学・生理学の知識を十分身につけた上で実習に臨むこと		
到達目標	臨床現場では、実習生であっても礼節や態度、挨拶や身だしなみ等に気を付け、社会人として常識のある行動・態度で臨むことが求められる。そのため、普段から医療人として相応しい接遇・態度・行動に気を付け普段の生活から実践することが求められる。前期の授業から臨床見学実習に出るための学習を行い、理学療法士の業務内容、医療者としての考え方などを復習したうえで実習に臨むこと。 1. 臨床現場の理学療法士の役割、具体的な仕事内容を説明できる。 2. 病院・介護・福祉現場で働く専門職としての心構えを理解し、説明できる。 3. この見学から何を得て、今後何に取り組むべきかを明確にし、説明できる。 4. 患者・利用者とのコミュニケーションを通じて、理学療法士に求められるものを学ぶ。		
授業形態	実習		

授業計画	
実習内容	
①実習では、患者や利用者を尊重しコミュニケーションと共感的態度をもって関係性を構築する。 ②理学療法士の役割と責任について理解し、医療チームの一員として自覚のある言動をとる。 ③情報収集（診療記録、画像所見、部門内・外情報を含む）を実施する。 ④臨床実習指導者の監督・指導の下で基本的な検査・測定項目の実施後に問題点を抽出し、国際生活機能分類（ICF：International Classification of Functioning, Disability and Health）の概念図の作成を通して、障害を持つ人の障害像（障害構造）を明らかにする。 1, 指導者の下で、対象者に説明を行い、検査・測定時に同意を得ることができる。 2, 利用者に無理のない姿勢や一定の時間内に検査・測定を実施できる。 3, 検査測定の目的を理解して、実施した検査・測定内容から問題点を抽出できる。 4, 機器の管理と検査時の安全・リスクに配慮できる。 5, 施設の規則や指導者からの指示を遵守することができる。 6, 感染対策の概念を持ち、責任ある行動がとれる。 7, 医療人として対象者に触れる時は十分に配慮することができる。 8, 多職種との人間関係を良好に保つことができる。 9, 自ら使用機器・備品、その他の書類等の整理整頓ができる。 10, 積極的に指導者や他のスタッフに向上心と探求心を持って行動することができる。 12, 指導者とコミュニケーションを取って積極的に行動する。	

成績評価	実習地評価、実習後発表をもとに総合的に判断する。	受講上のルール・留意点	臨床実習地での遅刻・早退・欠席は認めない。 実習指導者に対し報告・連絡・相談は必ず行う。 感染対策に対し、施設の規則に準じて行動する。
------	--------------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
実習地での課題やレポートのフィードバックは実習地で実施する。 実習終了後、担当教員からもフィードバックを実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし	学校の資料	
参考書			
オフィスアワー	実習担当者・担任と連絡を取る		

科目	医学倫理	単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	千田 佳遠里	学 年	3年生 後期
実績経験	資格	国立障害者リハビリテーションセンターにおける患者・障害者支援の知見に基づき、事例を交えながら講義を実施する。	
	学士		

授業の位置づけ	この授業では医療現場で求められる身体的・精神的・社会的な機能を理解し、その特徴に基づく行動規範を説明できるようになることを目的とする。幅広い世代で医療を実践するために、各年代での機能の特徴を理解し、行動を実践するためのプロフェッショナルの視点を持つための基礎を築くことが求められる。 1. 医療人に求められる倫理観と行動規範について理解する。 2. 患者学について理解する。 社会学、哲学、倫理学を学習したことのある学生は復習をしておくこと。		
到達目標	医療人として医療・福祉現場で求められるプロフェッショナルな行動規範を説明することができる。 理学療法士に必要な情意面について説明することができる。		
授業形態	講義	対面	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	リハビリテーションと社会学	リハビリテーションは人間の尊厳と社会性を取り戻す働きかけ
2回	関係の科学社会学	社会の概念、集団の概念・類型、社会学の対象領域、医療社会学
3回	コミュニケーション論	コミュニケーションのとり方、他者との出会い、グループワーク
4回	コミュニケーション論	効果的コミュニケーション、グループワーク、自己開示、相互理解
5回	社会的人間	社会的人間の形成、社会化の概念、文化の概念、言語的社会化
6回	社会的人間	文化の構造・機能、パーソナリティの形成、社会化のメカニズム
7回	社会学で考える人権	感性で捉える人権、人権とは何か、人権の三本柱、グループワーク
8回	社会学で考える人権	差別の本質・構造、差別行為、多様性と異質性を受け入れる共生社会

成績評価	レポート	受講上のルール・留意点	授業時間の3分の1以上欠席した者には単位を与えない
------	------	-------------	---------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
必要に応じて対応する

	書名	著書名	出版社名
教科書	概要を冊子にしたもの及びPPT資料を配布		
参考書	放送大学 社会学入門、 人権読本-じんけんの詩、他	森岡清志、他 今野俊彦編著	NHK出版 明石書店
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科 目	解剖学Ⅳ	単位・時間数	1単位・15時間
担当講師	外部講師	学 年	2年生及び3年生
実績経験	資格	大学医学部、歯学部解剖学講座の教員	

授業の位置づけ	本授業は大学医学部、歯学部のご協力のもと、「骨格系・筋肉系・神経系」を中心とした人体の基本構造を学び、三次元的に理解し、医の倫理、生命の尊厳を自ら学びとることを目標としている。 今まで学習した解剖学、生理学について、復習しておくこと。 大学施設にて「講義」「実習」を行う。		
到達目標	1. 人体の構造と機能について、基本構造を説明することができる。 2. 医療従事者を目指す者として、医の倫理を理解し、生命を尊厳を尊厳することができる。		
授業形態	講義・演習・実習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	解剖見学実習①	「骨格系・筋肉系」の構造について
2回	解剖見学実習②	「神経系」の構造について
3回	医の倫理①	医の倫理について
4回	医の倫理②	生命の尊厳について
5回	解剖見学実習③	骨格、関節と靱帯
6回	解剖見学実習④	筋系
7回	解剖見学実習⑤	神経系
8回	解剖見学実習⑥	内臓系

成績評価	レポート課題100%	受講上のルール・留意点	実習に臨むにあたり、礼節を保ち、医療従事者を目指す者として態度に十分気をつけること。
------	------------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
レポート課題について、フィードバックは全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	授業で使った解剖学、生理学等の教科書		
参考書	授業で使った解剖学、生理学等の教科書		
オフィスアワー	担当授業の前後		

理学療法学科 夜間部			
科 目	専門基礎医学演習 I	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	外来講師	学 年	3年、後期

詳細は、初回授業にて発表

評価方法	
------	--

教科書
参考書

理学療法学科 夜間部			
科 目	理学療法管理学	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	臼杵 寛、下村 周平	学 年	3年生 後期
実績経験	資格	下村：実務経験16年（病院、通所、訪問、予防事業等）の経験を踏まえ、実例を交えながら講義を行う。 臼杵：実務経験23年（病院、老健、通所、訪問、予防事業等）の経験を踏まえ、実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	理学療法士を養成する教育内容が改正され、2020年度より新たに「理学療法管理学」が必修化された。理学療法士には臨床に関する知識や技術を習得する事は当然のこととして、得た知識や技術を対象者に提供する際に必要な管理、医療保険や介護保険に関する管理、その他情報やリスク、感染に関する管理や教育に関する管理など、様々な管理(マネジメント)が要求される。この授業では理学療法士に必要とされる様々な管理(マネジメント)について、講義と演習を通して学修する。		
到達目標	臨床実習前後に知っておくべき医療機関の分類と組織の機能、チーム医療について理解する。理学療法業務に必要な医療保険制度、介護保険制度について理解する。様々な業務における管理(業務、情報、リスク、感染、教育など)について理解する。		
授業形態	講義・演習		

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	総論と病院の分類・組織	理学療法管理学が必要とされる背景、病院の組織・部門とその機能
2回	専門職とチームケア	リハビリテーションに関わる専門職・事務職の役割と特徴、委員会とチーム
3回	専門職とチームケアの演習	項目に関するグループワーク・発表
4回	医療保険制度と介護保険制度	医療保険制度と介護保険制度の特徴・体系・サービス
5回	診療・介護報酬と収益構造	臨床におけるリハビリテーション料の算定、介護報酬・診療報酬の支払い、人件費とコスト
6回	診療報酬とコストの演習	項目に関するグループワーク
7回	診療報酬とコストの演習	項目に関する発表
8回	業務管理	理学療法士の業務の流れ、他職種との業務調整、労務管理など
9回	情報管理	診療記録・電子カルテなどの分類と管理、コミュニケーション技術
10回	リスク管理	医療・介護におけるコンプライアンス、インシデントとアクシデントなど
11回	リスク管理の演習	項目に関するグループワーク・発表
12回	感染症管理	感染と感染症の概要、感染症の予防、感染対策
13回	権利擁護と職業倫理	インフォームドコンセント、個人情報保護、職業倫理、ハラスメントなど
14回	卒前教育	診療参加型臨床実習、臨床教育
15回	卒後教育 PTの政治政策への関与	生涯学習、人事考課、就職活動、職能団体と政治への関与など

成績評価	レポート課題100%	受講上のルール・留意点	演習は積極的に取り組んでください。 詳細は初講日に説明します。
------	------------	-------------	------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
適宜、個人及び全体に対して実施します。

	書名	著書名	出版社名
教科書	15レクチャーシリーズ 理学療法管理学	長野 聖(責任編集)	中山書店
オフィスアワー	下村：授業前後及びメール（s-shimomura@nichireha.ac.jp） 臼杵：授業前後及びメール（h-usuki@nichireha.ac.jp）		

理学療法学科 夜間部			
科 目	義肢装具学	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	木下 修 石垣栄司	学 年	3年生
実績経験	資格	木下：理学療法士・義肢装具士として42年、治療・製作・適合判定に従事しました。総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・訪問・デイサービス・保健所・教育機関は大学・大学院などに従事していました。 石垣：理学療法士として33年。総合病院・維持期病院・教育機関に勤務。 総合病院ではPTとして義肢ソケットの作成，組み立て，アライメント修正などを行ってきた。	
	木下：理学療法士（31年） 義肢装具士（42年） 石垣：理学療法士（33年）		

授業の位置づけ	リハビリテーション関連職種では、理学療法士の装具治療に対する役割は重要になっている。 近年では、急性期より装具を治療の一環として処方されている。 治療で使用する装具の装着だけではなく、日常生活動作・応用動作に使用できるように適合・チェックアウトなど治療効果を上げる上で重要な役割を担っている。 切断は、脳卒中や骨折，呼吸循環疾患などと比べ学生時，また臨床場面でも遭遇する機会が少ない疾患である。 そのため，学内での学習では構造・部品名，特殊な用語などイメージしにくい内容が多いものの，国家試験では毎年出題されている。 講義では，実際の義肢や動画を見ながら学習しイメージしやすいように説明する。		
到達目標	装具：基礎疾患を理解した上で、障害と装具の基礎知識を学習する。 装具の概念などの基礎知識と構造と疾患の流れを理解する。 義足：切断の原因とその治療について説明できるようになる。 義足の種類・適合・アライメントについて理解し、切断の評価を理解し，臨床場面での切断の理学療法を理解する。		
授業形態	講義・演習	対面授業	

授業計画			
回数	項目	講義内容	
1回	総論・概念	装具総論・概念・歴史	
2回	各論：下肢装具	下肢装具総論・下肢の機能解剖学	
3回		長下肢装具・短下肢装具・シューホン装具	
4回		膝・足関節装具・その他の装具：免荷装具・股装具	
5回	体幹装具	体幹の解剖・運動の機能について	
6回		頸椎・胸椎・腰椎・側弯症装具について	
7回	靴型装具	足部の解剖と機能解剖学について・インソール（足底板）	
8回	上肢装具	靴型装具各論	
9回	義肢学総論	歴史，疫学，原因，適応，切断高位と切断手技，支給サービス，義肢の分類(義手含)	
10回	下肢切断の理学療法評価	形態測定，断端評価，筋力評価，関節可動域評価，感覚検査，疼痛評価，皮膚感応テスト	
11回	義足の継手	股継手，膝継手，足継手，その他部品	
12回	大腿義足ソケット	大腿義足ソケットの種類・特徴，懸垂装置，ソケットの評価	
13回	大腿義足アライメント	ベンチ・スタティック・ダイナミックアライメント	
14回	下腿義足ソケット	下腿義足ソケットの種類・特徴，懸垂装置，ソケットの評価	
15回	下腿義足アライメント	ベンチ・スタティック・ダイナミックアライメント	
16回	特殊義足	股義足・膝義足・サイム義足・足部義足・術前の理学療法，良肢位保持，断端管理，義足装着時期，術後の理学療法等	
成績評価	筆記試験100%	受講上のルール・留意点	積極的に行動し発言をしてください。 詳細は初講日に説明します。

課題やレポートに関するフィードバック
レポート課題は、授業中全体に対しフィードバックし、レポートは個別に対応する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	PT・OTビジュアルテキスト 義肢・装具学 第2版	監修:高田治実/編集:豊田輝，石垣栄司	羊土社
オフィスアワー	授業時間以外で質問のある場合には教員室・メールしてください。 木下：o-kinoshita@nichireha.ac.jp 石垣：e-ishigaki@nichirehaa.ac.jp		

理学療法学科 夜間部			
科目	日常生活活動学Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	篠田 良平	学 年	3年生 前期
実績経験	資格	篠田：実務経験 30年 理学療法士として、回復期病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。 実務経験を活かし実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	人と向かい合うことを基本としている理学療法において、日常生活活動（ADL）は、運動療法とともに大きな領域を占めている。理学療法士にはクライアントの障害とADLとの関連を正しくとらえ、1人1人の生活スタイルにマッチした具体的なADLの指導の実施とQOLを高める視点が求めている。 本授業では日常生活活動学Ⅰを土台とし、疾患毎の病態を確認した上で、疾患毎のADLの実践方法を解説する。基本動作とそれに関連する評価の関係性を理解する。		
到達目標	1．疾患毎の病態を説明できる。 2．疾患毎のADL指導ができる。		
授業形態	講義・演習・実習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	ADLと評価法	基本動作と各種評価との関連
2回	ADLと評価法	基本動作と各種評価との関連
3回	ADLと評価法	基本動作と各種評価との関連
4回	視覚障害	歩行指導 疾患と介助の基本ルール
5回	片麻痺①	起居動作
6回	片麻痺②	セルフケア
7回	整形外科疾患	人工股関節全置換術後、下肢切断
8回	関節リウマチ	ADL注意点、リウマチ体操
9回	脊髄損傷①	起居動作
10回	脊髄損傷②	セルフケア
11回	神経筋疾患・難病	パーキンソン病、筋ジストロフィー、ALS
12回	脳性麻痺	起居動作、生活動作の注意点
13回	臨床体験	視覚障害と杖歩行
14回	臨床体験	視覚障害と杖歩行
15回	総まとめ	ADL関連の総復習

成績評価	定期試験：レポート課題	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 実技では動きやすい服装を準備する。また空いた時間は繰り返し復習する。
課題やレポートに関するフィードバック			
実技に関するフィードバックは実技練習中、練習の後、個別または全体に対して適宜実施する。			

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学 第6版	鶴見隆正、隆島研吾編集	医学書院
参考書	日常生活活動 第2版	千住秀明監修	神陵文庫
オフィスアワー	担当授業の前後		

理学療法学科		夜 間 部	
科 目	疾患別理学療法 I -B	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	米村 豊	学 年	3年生 前期
実績経験	資格	2008年から整形外科領域で培った知識と技術を提供するとともに、この経験を活かし学生自身で考え行動できる内容の授業を提供する。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	整形外科疾患の理学療法評価・運動療法の知識・技術の習得。		
到達目標	整形外科疾患における理学療法評価・運動療法を考察、説明、実践できる。		
授業形態	対面を基本とする		

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	股関節疾患	変形性股関節症などの病態と障害像を学ぶ。 外科的治療の種類や方法について学ぶ。 股関節疾患および術前・術後の理学療法評価・治療法を学ぶ。
2回		
3回		
4回		
5回	膝関節疾患	変形性膝関節症などの病態と障害像を学ぶ。 外科的治療の種類や方法について学ぶ。 股関節疾患および術前・術後の理学療法評価・治療法を学ぶ。
6回		
7回		
8回		
9回	足関節疾患	足関節捻挫などの病態と障害像を学ぶ。 足関節疾患の理学療法評価・治療法を学ぶ。
10回		
11回		
12回	上肢骨折	上肢骨折の病態と障害像を学ぶ。骨折に対する理学療法評価・治療法を学ぶ。
13回	下肢骨折	下肢骨折の病態と障害像を学ぶ。骨折に対する理学療法評価・治療法を学ぶ。
14回	関節リウマチ	関節リウマチの病態を理解し、時期に応じた理学療法評価・治療法を学ぶ。
15回	運動連鎖	運動連鎖の基本を理解し、動作分析や治療への応用について学ぶ。

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	教科書のほか、配布資料を使用 解剖学・運動学の理解を深めておくこと
------	------	-------------	--------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック	
適宜	

	書名	著書名	出版社名
教科書	運動器の運動療法	小柳磨毅ほか	羊土社
参考書			
オフィスアワー	なし		

理学療法 学科 夜 間 部			
科 目	疾患別理学療法Ⅱ-A	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	鈴木 雅男	学 年	3年生 前期
実績経験	資格	実務経験 38年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	この授業では、中枢神経疾患における片麻痺患者の理学療法について学習する。片麻痺患者は脳血管障害によるものが多く、「脳卒中治療のガイドライン」においても急性期から回復期、維持期に渡って多職種による包括的なリハビリテーションが推奨されている。その中で理学療法士が果たす役割は重要であるが、アプローチ理論が完成されていないのが現状である。したがってこの授業では基本的なアプローチ方法に触れ、脳卒中片麻痺患者への理学療法の全体像をとらえることを目的とする。 以下の内容を理解する。 1．脳卒中片麻痺患者の基本的な障害像 2．急性期、回復期、維持期の理学療法 3．脳卒中片麻痺患者に対するリスクマネジメント		
到達目標	1．脳卒中片麻痺患者の病態を説明できる。 2．麻痺の回復と神経系・脳の可塑性について説明できる。 3．急性期、回復期、維持期の各期の理学療法の目的と方法について説明できる。 4．リハビリテーション医療における安全管理・推進のためのガイドラインに基づきリスク管理ができる。 5．痙性に対する理学療法を説明できる。 6．片麻痺患者の合併症について説明できる。 7．脳卒中のCT, MRI画像を判読できる。		
授業形態	講義・演習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	病態	中枢神経疾患の病態、運動麻痺と伝導路、陽性兆候と陰性兆候
2回	麻痺の回復	神経系・脳の可塑性と麻痺の回復メカニズム
3回	急性期	目的、リスク管理とガイドライン
4回	急性期	ポジショニング、関節可動域練習、ギャッジアップから離床
5回	急性期	片麻痺体験、関節可動域練習の注意点（肩・股）
6回	回復期	痙性とは？痙性に対しての注意点及び対応
7回	回復期	体幹と上下肢
8回	回復期	座位バランス
9回	回復期	寝返り、起き上がり
10回	回復期	立位バランス、立ち上がり、立ち座り、
11回	回復期	片脚立位練習 歩行練習と異常歩行
12回	合併症	身体機能・能力の自己管理方法拘縮、異所性骨化、肩手症候群、CRPS
13回	合併症	起立性低血圧、肩関節亜脱臼、プッシュャー症候群、嚥下障害
14回	評価	SIASほか
15回	画像	CT、MRI画像の判読

成績評価	レポート：100％	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 実技では動きやすい服装を準備する。また空いた時間は繰り返し復習する。
------	-----------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	プリント配布		
参考書	標準理学療法学 運動療法学 各論 第4版 脳卒中理学療法の理論と技術	吉尾雅春 原寛美 吉尾雅春	医学書院 メジカル
オフィスアワー	担当授業前後、教員室にて		

科 目	疾患別理学療法Ⅱ-B		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	鈴木 雅男		学 年	3年生 後期
実績経験	資格	鈴木 雅男：実務経験 38年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。		
	理学療法士			

授業の位置づけ	高齢者は加齢に伴い様々な疾患に罹患する可能性が高く、理学療法の対象となることが多い。また平均寿命に延長により健康寿命を延ばすことも重要となっている。この授業では、高齢者の特徴について理解し運動療法について学習する。また高齢者に多い転倒と運動療法について考察してもらう。		
到達目標	1．高齢者の分類と特徴を理解する。 2．廃用症候群について理解する。 3．サルコペニアとフレイルについて理解する。 4．高齢者の運動療法について理解する。		
授業形態	講義・実習		対面授業

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	高齢者 総論	高齢者と老化
2回	高齢者 総論	老化の特徴
3回	高齢者 総論	高齢者の尊厳と接し方
4回	高齢者 各論	廃用症候群
5回	高齢者 各論	サルコペニアとフレイル
6回	高齢者 各論	ロコモティブシンドローム
7回	高齢者 各論	運動療法
8回	まとめ	まとめ

成績評価	レポート：100%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 実技では動きやすい服装を準備する。また空いた時間は繰り返し復習する。
------	-----------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	運動療法学 各論 第5版	吉尾雅春	医学書院
オフィスアワー	担当授業前後、教員室にて		

		理学療法学科	夜間部
科 目	疾患別理学療法Ⅲ-A	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	鈴木 雅男	学 年	3年生 前期
実績経験	資格	実務経験 38年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	この授業では、神経筋疾患の特徴について学び、各疾患の病態を理解したうえで、必要な評価項目の選択や運動プログラムの立案を学習する。 学習する疾患は以下の通りである。 1. パーキンソン病 2. 脊髄小脳変性症 3. 筋萎縮性側索硬化症 4. ポリオ		
到達目標	1. 各疾患の病態や特徴を述べることができる。 2. 各疾患の障害構造を評価するための評価項目が選択できる。 3. 各疾患の理学療法プログラムを立案できる。		
授業形態	講義・実習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	パーキンソン病	病態と症状、障害像、大脳基底核の機能
2回		評価、リスク管理
3回		運動療法とADL管理
4回		運動療法実技
5回	脊髄小脳変性症	病態と症状、障害像
6回		評価とリスク管理
7回		運動療法とADL管理、運動療法実技
8回	筋萎縮性側索硬化症	病態と症状、障害像
9回		評価とリスク管理
10回		運動療法とADL管理、運動療法実技
11回	ポリオ	病態と症状、障害像
12回		評価とリスク管理、理学療法
13回	症例検討	症例情報をもとに障害像を把握するための評価項目を考える。 検査結果から問題点を抽出し、理学療法プログラムを立案する。
14回		
15回	まとめ	総復習

成績評価	筆記試験：100％	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 演習や実技では積極的に発言する。
------	-----------	-------------	--

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	病気がみえる 〈vol.7〉 脳・神経 第2版	医療情報科学研究所	メディックメディア
	プリント配布		
オフィスアワー	担当授業前後、教員室にて		

		理学療法学科	夜 間 部
科 目	疾患別理学療法Ⅳ-A（呼吸）	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	塩澤 和人	学 年	3年生 前期
実績経験	資格	実務経験 18年 理学療法士として、回復期・急性期病院、デイサービス、障害者福祉施設、介護予防事業、教育機関に携わった実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	人口構造の高齢化に伴う呼吸器疾患患者の増加は世界的規模である。慢性閉塞性肺疾患は死亡原因の第3位である。呼吸リハビリテーションは多くのエビデンスが集積され、特に運動療法の継続が重要視されている。本授業では呼吸器疾患の理学療法ができるようになるために、呼吸器疾患の病態、評価、理学療法について実技を交えて解説する。 授業方法は「講義」「実技」「ケーススタディを通してディスカッション、グループ発表」を予定している。 呼吸器に関する解剖学、生理学を理解しておくことが望ましい。		
到達目標	1．呼吸器疾患の病態を説明できる。 2．呼吸疾患疾患に必要な評価項目を列挙できる。 3．呼吸器疾患の理学療法ができる。		
授業形態	講義・演習・実習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	運動生理学	内部障害理学療法とは、エネルギー代謝と運動
2回	慢性呼吸不全総論	呼吸不全の病態、診断基準、原因、呼吸器の解剖と整理
3回	フィジカルアセスメント	視診、問診、聴診、触診、打診
4回	呼吸機能の評価	スパイログラム、フローボリューム曲線、換気障害の判定、胸部X線写真
5回	呼吸理学療法評価	呼吸困難感、運動耐用能
6回	運動療法①	コンディショニング（口すぼめ呼吸、横隔膜呼吸、胸郭可動域の拡張）
7回	運動療法②	全身持久力・筋力トレーニング、運動強度、中止基準、ADL訓練
8回	排痰法	体位排痰法、排痰手技（スクイーピング他）、ハフイング・咳嗽
9回	外科手術前後、酸素療法	胸・腹部手術前後の理学療法、酸素療法の目的・効果・方法、HOT
10回	人工呼吸器	種類、構造、換気モード、病態
11回	演習①	呼吸器疾患のケーススタディ（ディスカッション）
12回	演習②	呼吸器疾患のケーススタディ（発表）
13回	吸引①	講義（意義、感染対策）
14回	吸引②	実技
15回	総まとめ	復習

成績評価	筆記試験100％	受講上のルール・留意点	実技では動きやすい服装（基本は短パン、Tシャツ）の準備をすること。
------	----------	-------------	-----------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
実技に関するフィードバックは実技練習中、練習の後、個別または全体に対して適宜実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学 内部障害理学療法学 第2版	高橋哲也、神津玲、野村卓生編集	医学書院
参考書	呼吸リハビリテーションマニュアルー運動療法ー第2版	呼吸ケアリハ学会他編集	照林社
オフィスアワー	担当授業の前後		

理学療法学科		夜 間 部	
科 目	疾患別理学療法IVB（循環代謝）	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	高瀬 慎輔	学 年	3年生 後期
実績経験	資格	理学療法士として、回復期病棟、急性期病院、デイサービス、障害者福祉施設、介護予防事業、訪問リハ、教育機関に携わった実務経験を活かし、事例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	内部障害（呼吸・循環・代謝障害）者は外部からは障害があることがわかりにくい（いわゆる“見えない障害”）ため、周囲の理解が得られにくいという不利益を受けやすい。理学療法では、いかにしたらできるようになるかという障害学的分析に加えて、なぜそのような状態なのか、その症状や症候はどこから来ているのか、医学的情報を収集し、病態生理を理解する症候学的分析も重要である。「症状の正しい観察」こそが臨床理学療法の第一歩であり、観察を通じた患者の理解こそが内部障害理学療法の最大の醍醐味でもある。 本授業では、循環代謝障害に対する理学療法について、病態の理解、評価、理学療法等を解説する。授業方法は、「講義」「ケーススタディ」「ディスカッション」「グループ発表」で構成される。循環器系の解剖と生理の概要を理解しておくこと。		
到達目標	1．各疾患の病態を説明し、評価、理学療法、リスク管理、患者教育ができる。 2．心電図をみて、不整脈の種類とリスク管理を説明できる。 3．適切な運動強度を接敵できる。		
授業形態	講義・演習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	心リハの概要	目的、効果、対象疾患、循環器系の解剖と生理
2回	起立性低血圧	発症機序と対応・予防
3回	虚血性心疾患①	心不全のメカニズムと症状・リスク管理
4回	虚血性心疾患②	心疾患の理学療法
5回	不整脈と心電図①	心電図の基本事項、刺激伝導系
6回	不整脈と心電図②	正常洞調律の波形の理解
7回	不整脈と心電図③	心房細動、心房粗動、期外収縮
8回	不整脈と心電図④	重症不整脈、ブロック波形
9回	不整脈と心電図⑤	虚血と梗塞
10回	代謝疾患①	評価、低血糖のリスク管理等
11回	代謝疾患②	糖尿病の病態と合併症
12回	代謝疾患③	運動療法
13回	代謝疾患④	食事療法
14回	代謝疾患⑤	薬物療法
15回	代謝疾患⑥	療養指導

成績評価	筆記試験100%	受講上のルール・留意点	授業中の説明を良く聞き、理解を深める
------	----------	-------------	--------------------

課題やレポートに関するフィードバック
FBは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー	メールでの連絡は随時 s-takase@nichireha.ac.jp		

理学療法学科 夜 間 部			
科 目	疾患別理学療法Ⅴ（小児）	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	山本 紘靖	学 年	3年生 前期
実績経験	資格	地域の診療所にて14年間勤務し、脳性麻痺等の小児疾患の理学療法を実施。 また特別支援学校にて3年間、非常勤講師として勤務。 医療的観点と教育的観点の両面から臨床的な見解を踏まえ、教示する。	
	理学療法士 （認定理学療法士（発達障害））		

授業の 位置づけ	○本講義を通じて、小児期に原因を持つ疾患および障がいに対する理学療法の特性について教示する。 ○また発達の段階において障がいを有する全ての世代の人々の生活機能を改善することの重要性を説明する。 ○講義にて小児疾患の特性の確認をした上で、患者動画を使用しグループディスカッションを行う。 ○グループディスカッションでは、理学療法評価として、評価項目を検討し、短期及び長期目標を設定する。 ○また患児とその家族との関わり方についてもディスカッションする。		
到達目標	○脳性麻痺や小児整形疾患、遺伝疾患、染色体異常、低出生体重児や発達障害などの疾患特性の理解する ○小児理学療法について、評価項目の選定と目標立案ができる。 ○家族へのかかわりを療育の観点でとらえ、小児に対する理学療法を理解する。		
授業形態	講義・グループディスカッション	「遠隔授業」もしくは「対面と遠隔の併用授業」	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	小児理学療法概論	小児に対する理学療法について療育の観点も含め、理解する
2回	小児理学療法の特殊性と評価	成人に対する理学療法との共通点や差異について学び、 小児理学療法の基本的概念と小児特有の評価について理解する
3回	人間発達学(運動発達)	正常な運動発達について学ぶ
4回	人間発達学 (上肢・摂食・姿勢反応の発達)	上肢の発達について姿勢の安定と感覚の発達のかかわりと 摂食機能の発達を理解する
5回	脳性麻痺概論	脳性麻痺の定義などの概論について学ぶ
6回	痙直型脳性麻痺(両麻痺)	痙直型脳性麻痺(両麻痺)の症状や評価について学ぶ
7回	痙直型脳性麻痺(四肢麻痺)	痙直型脳性麻痺(四肢麻痺)の症状や評価について学ぶ
8回	痙直型脳性麻痺(片麻痺)	痙直型脳性麻痺(片麻痺)の症状や評価について学ぶ
9回	アテトーゼ型脳性麻痺	アテトーゼ型脳性麻痺の症状や評価について学ぶ
10回	重度心身障害(重度脳性麻痺)	重度心身障害の各ライフステージに合わせた理学療法について学ぶ
11回	小児整形疾患（二分脊椎等）と 筋ジストロフィー症	主な小児整形疾患（二分脊椎等）の各種症状と筋ジストロフィー症について学び、それぞれの疾患に合わせた評価や介入について学ぶ
12回	染色体異常（ダウン症候群）	ダウン症候群などの染色体異常の特徴的な症状について学ぶ
13回	早産児（低出生体重児・ハイリスク児）	早産児（低出生体重児・ハイリスク児）の評価や発達を促すための介入について学ぶ
14回	発達障害（発達性協調運動障害） と運動発達遅滞	発達障害（発達性協調運動障害など）や運動発達遅滞について学び 成長発達を促すための配慮点や介入について理解する
15回	まとめ(練習問題と質疑応答)	国家試験の練習問題を通して、小児理学療法について知識の整理をする

成績評価	学期末に定期テスト実施 定期テストはマークシート形式 成績は定期テストの結果で評価	受講上の ルール・留意点	授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない
------	---	-----------------	----------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
課題やレポートは実施しない。 授業の最後に講義内容に対する質問時間を設ける。 また質問に対する回答は必要に応じて、次の講義開始時に全体にフィードバックする。

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書	イラストでわかる小児理学療法	上杉雅之 監修	医歯薬出版 株式会社
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

理学療法学科 夜間部			
科 目	理学療法技術論 I	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	鈴木 章規	学 年	3年生 後期
実績経験	資格	理学療法士として病院に5年、訪問看護ステーションに9年程度勤務してきました。その中でMovement science、DNS、ボイタ法、MTA等の治療技術を勉強してきました。講義はその経験を活かし実技を交えながら行います。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	・将来、理学療法士として働くうえで、臨床推論はとても重要な技術になります。この授業では筋骨格系の障害に対する検査し評価から治療立案・検証を講義と実技を通して解説していきます。その過程で理学療法士に必要な観察眼と思考力の向上を高めることが目的です。 ・講義は2～3人一組で実技を行う。		
到達目標	・姿勢と動作の評価を行い、それを説明できるようになる。 ・治療技術について関心を持ち、患者モデルの問題にあった治療手技を選択することができる。		
授業形態	講義・演習	併用授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	総論	理学療法士としての考え方・接し方
2回		
3回	姿勢・動作の講義・演習	姿勢・動作の観察と検査
4回		
5回	下肢帯の検査講義・演習	下肢帯の観察と検査、臨床推論、治療
6回		
7回		
8回		
9回	上肢帯の検査講義・演習	上肢帯の観察と検査、臨床推論、治療
10回		
11回		
12回		
13回	体幹の検査講義・演習	上肢帯の観察と検査、臨床推論、治療
14回		
15回		

成績評価	筆記試験	受講上のルール 留意点	・講義時間数の1/3以上欠席した者には単位を与えない。 ・講義はジャージ等の動きやすい服装で出席する。 デニム、チノパン等で参加した場合は減点とする。 また、指輪、ピアス、時計等のアクセサリーをつけていた場合も減点とする（結婚指輪は良い）。
------	------	----------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

理学療法 学科 夜 間 部			
科 目	理学療法技術論Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	黒木／雨宮／高橋浩平／桑島／鈴木章規	学 年	3年生 後期
実績経験	資 格	実務経験 20年以上、総合病院・整形外科クリニック・地域にて活動している専門家が講義・実技演習をおこなう。 黒木光：Movement links／DNS認定療法士、国際ボイタセラピスト 雨宮淳：オーソティックスソサエティー認定フットトレーナー 高橋浩平：栄養サポートチーム専門療法士（学会認定） 桑島泰輔：米国呼吸療法認定療法士 鈴木章規：Movement links／DNS認定療法士、国際ボイタセラピスト	
	理学療法士、他		

授業の位置づけ	この授業では筋骨格系の障害に対する評価と治療を講義と実技を通して解説する。理学療法士に必要な観察眼と思考力の向上を高めることが目的である。オムニバス形式で臨床内容を学ぶ。PTの視点からの栄養学、インソールの専門家による足・歩行の評価と足底挿板の作成、急性期病院の理学療法についておこなう。 授業方法は講義が50％、実技演習が50％である。		
到達目標	・姿勢と動作の評価を行い、それを説明できるようになる。 ・治療技術について関心を持ち、患者モデルの問題にあった治療手技を選択することができる。		
授業形態	講義・演習	併用授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	概論（鈴木章規・黒木）	筋骨格系障害の評価
2回	評価（鈴木章規・黒木）	発達運動発達をベースにした運動・姿勢観察
3回	治療（鈴木章規・黒木）	発達運動発達をベースにした運動療法
4回	薬学	薬学の基本
5回	薬学	薬学の基本
6回	薬学	疾患と薬物療法
7回	薬学	疾患と薬物療法
8回	栄養学（高橋浩平）	PTと栄養学の関わり
9回	栄養学（高橋浩平）	栄養学をどうPTの現場で使うか
10回	急性期（桑島）	ICUでのPTの仕事
11回	急性期（桑島）	実際の理学療法について
12回	足底板（雨宮・米村）	概論：足の評価と治療
13回	足底板（雨宮・米村）	評価
14回	足底板（雨宮・米村）	足底板作成
15回	足底板（雨宮・米村）	再評価・修正

成績評価	演習課題100％ 授業時間数の3分の1以上欠席した者は試験は受験させず、単位を与えない	受講上のルール・留意点	動きやすい服装（半袖、短パン）、観察しやすい服装を用意ください。ジーパンや体の線が見にくい服装は控えてください。 お互いの身体を利用しながら学習をおこないますので、互いに気遣いましょう。 足底板の作成時のご自身の靴を使いますので、 中敷がある靴 をご用意ください。（普段履いている靴で大丈夫です）
------	--	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
毎回、授業の疑問点について、授業シートでFBする。

	書名	著書名	出版社名
教科書	資料配布		
参考書			
オフィスアワー	メールでの連絡は随時 h-kuroki@nichireha.ac.jp		

理学療法 学科 夜 間 部			
科 目	理学療法技術論Ⅴ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	鈴木 雅男	学 年	3年生 後期
実績経験	資格	実務経験 38年 理学療法士として、一般病院、総合病院、教育機関に常勤として勤務。非常勤として市・区の保健センター、介護老人保健施設、訪問リハビリテーションにて勤務歴があり、急性期から維持期にかけての経験から授業を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	この授業は中枢神経疾患、特に片麻痺患者に対する治療手技を学習するのが目的であるが、完全に確立された治療法はない。それは中枢神経系の傷害部位や程度によっても障害状況が異なること。中枢神経系の機能について不明なことが多いのも関係している。その状況で現在解明され発展してきている神経生理学による姿勢・運動制御をもとに、健康な人の姿勢や運動を理解することが、今後中枢神経疾患患者の姿勢・動作を見ていく上での基礎となると考える。したがってこの授業では、健康人の姿勢・運動を神経生理学的にとらえ、評価し基本動作を誘導していく技術を身につける事を目的とする。 以下の内容を理解する。 1. 姿勢アライメントや姿勢筋緊張の評価 2. 健康人の姿勢制御の理解 3. 健人の動作様式の理解 4. 姿勢や動作の誘導方法の理解		
到達目標	1. 姿勢制御について理解する。 2. 姿勢アライメントを検査することができる。 3. 姿勢筋緊張を検査することができる。 4. 健常人の基本動作様式を説明できる。 5. 基本動作の操作誘導をすることができる。		
授業形態	講義・演習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	神経生理学的基础	神経系の発達と姿勢制御の関係
2回	神経生理学的基础	姿勢制御のメカニズム
3回	神経生理学的基础	基本姿勢、姿勢・動作の観察の手がかりと要素 (ランドマークkey points of controlテンタクルとブリッジ)
4回	評価	背臥位～側臥位のポイント (背臥位アライメント、姿勢筋緊張、寝返り、起き上がり)
5回	治療、誘導	寝返り・起き上がりのハンドリング、背面への感覚入力
6回	評価内	端座位のポイント (端座位アライメント、姿勢筋緊張、姿勢反応)
7回	治療、誘導	端座位のハンドリング、座骨からの感覚入力
8回	評価	立位と立ち上がり動作のポイント (立位のアライメント、姿勢筋緊張、立ち上がり)
9回	治療、誘導	立ち上がり・着座・片脚立位のハンドリング
10回	治療	足底からの感覚入力 (足底と前庭脊髄システム)
11回	系統的誘導	背臥位→座位→四つ這い
12回	系統的誘導	四つ這い→膝立ち→立位
13回	治療、誘導	歩行 (同側のテープ固定)
14回	まとめ	各姿勢評価の復習
15回	まとめ	各ハンドリングの復習

成績評価	レポート:100%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 実技は時間の限り反復練習する。
------	-----------	-------------	---------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	プリント配布		
参考書			
オフィスアワー	担当授業前後、教員室にて		

科 目	総合演習Ⅲ		単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	P T 教員		学 年	3年生 後期
実績経験	資格			
	理学療法士			

授業の位置づけ	臨床実習Ⅰを踏まえて、症例への評価～プログラム立案までを実際に行い、今まで学んだ医学的基礎知識や基礎的な理学療法評価への理解を深める。チームで共同して症例に取り組むことで共通の目的に向かって一緒に活動することを通して、 理学療法の専門職として社会に貢献するのに必要な連携の基盤づくりを行う。また、これまでの基礎学習で身につけたコミュニケーション能力やチームワークの重要性を通して、医療現場における専門職連携を理解する。		
到達目標	1． 症例情報から評価項目を選択できる。 2． 正確な検査を実施できる。 3． 評価情報から問題点をICFにまとめられる。 4． 評価結果からゴール設定、プログラムの立案ができる。		
授業形態	講義・演習・実習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	授業の目的と実施内容について
2回	症例情報の整理と理解	症例情報を整理し、全体像をまとめる
3回		症例情報を整理し、全体像をまとめる
4回		症例情報を整理し、全体像をまとめる
5回		症例情報を整理し、全体像をまとめる
6回		症例情報を整理し、全体像をまとめる
7回		症例情報を整理し、全体像をまとめる
8回		症例情報を整理し、全体像をまとめる
9回		症例情報から理学療法評価項目立案
10回		ICFによるまとめ
11回		ゴール、プログラム立案
12回	発表準備・まとめ	個別の検討・発表資料作成
13回	発表	まとめた内容を発表
14回	発表	まとめた内容を発表
15回	症例解説、フィードバック	症例について解説、演習についてよかった点や今後の課題を整理する

成績評価	授業内発表：50% レポート：50%	受講上のルール・留意点	授業中は私語を謹んで授業に集中する。 グループワーク課題は積極的に行う。
------	-----------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし		
参考書			
オフィスアワー			

		理学療法学科	夜 間 部
科 目	地域理学療法学	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	下村 周平	学 年	3年生 前期
実績経験	資格	実務経験16年（病院、通所、訪問、予防事業等）の経験を踏まえ、 実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	この授業では地域包括支援体制に帰属するリハビリテーションについて学ぶ。なかでも、理学療法分野の役割について学び、環境ごとに求められる理学療法の役割をその特徴を理解し、説明できるようになることを目的とする。 幅広い環境で理学療法を実践するために、チームアプローチを理解し、その規範に基づき行動するための理解が求められる。		
到達目標	1．地域リハビリテーションについて理解し説明することができる 2．その中での理学療法士の役割や実務を理解し説明することができる 3．地域の中での多職種連携やチームアプローチを理解し説明することができる		
授業形態	講義・演習		

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	総論 地域理学療法学①	地域理学療法とは
2回	総論 地域理学療法学②	地域理学療法と関連する制度の変遷
3回	総論 地域理学療法学③	地域包括ケアについて
4回	各論 地域理学療法学④	障害者総合支援法
5回	各論 保険制度①	介護保険制度①仕組み
6回	各論 保険制度②	介護保険制度②給付
7回	各論 介護保険サービス①	通所リハの機能と理学療法士の役割
8回	各論 介護保険サービス②	通所介護、短期入所等
9回	各論 介護保険サービス③	訪問リハの機能と理学療法士の役割
10回	各論 介護保険サービス	訪問、介護予防事業、総合事業
11回	各論 介護保険サービス	介護老人保健施設、介護老人福祉施設の機能と理学療法士の役割
12回	各論 介護保険サービス	疾患別にみる地域理学療法の特徴
13回	各論 介護保険サービス	災害支援における理学療法士の関わり
14回	各論 連携・対人支援技術	多職種連携・対人支援技術
15回	各論 連携・対人支援技術	終末期の関わり方

成績評価	レポート課題100%	受講上のルール・留意点	演習には積極的に参加すること
------	------------	-------------	----------------

課題やレポートに関するフィードバック
適宜、個人及び全体に実施。

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書	適宜紹介		
オフィスアワー	下村：授業前後及びメール（s-shimomura@nichireha.ac.jp）		

理学療法学科 夜 間 部			
科 目	生活環境論	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	下村 周平	学 年	3年生 前期
実績経験	資格	実務経験16年（病院、通所、訪問、予防事業等）の経験を踏まえ、 実例を交えながら講義を行う。	
	理学療法士		

授業の 位置づけ	私たちの生活に密着した広範囲な視点から理学療法学を考えることで、日々の暮らしに役立つ 理学療法士を教育していく。		
到達目標	日常生活活動の一要素である生活環境を住宅及び福祉用具の視点から再考し、新しい分野である 生活環境学を理解できる。		
授業形態	講義及び演習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回	概論	生活環境のとらえ方 と日本における生活環境の特徴と課題
2回	法制度	生活環境整備に関する法制度
3回	介護保険	介護保険における福祉用具と住宅改修
4回	生活環境整備 総論	生活環境整備の進め方
5回	生活環境整備 各論	生活環境整備の基本〔段差・スペース・床材・手すり・建具〕
6回	生活環境整備 各論	玄関・アプローチ・廊下・階段の環境整備
7回	生活環境整備 各論	トイレの環境整備
8回	生活環境整備 各論	浴室・脱衣室の環境整備
9回	生活環境整備 各論	台所・食堂・居間・寝室の環境整備
10回	生活環境整備 実際	疾患別環境整備①〔中枢神経障害〕
11回	生活環境整備 実際	疾患別環境整備②〔運動器障害〕
12回	生活環境整備 実際	地域における住環境整備と交通
13回	課題発表	レポート発表
14回	福祉用具の見学	国際福祉機器展見学
15回		

成績評価	レポート	受講上のルール・留意点	必ず期限内に提出すること
------	------	-------------	--------------

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著者名・出版社	
参考文献	教科書：『標準理学療法学 専門分野 日常生活活動学・生活環境学』 参考書：『生活環境学テキスト』	鶴見隆正 編集 医学書院	医学書院
		細田多穂 監修	南江堂
オフィスアワー	授業前後、メールs-shimomura@nichireha.ac.jp		

科 目	臨床実習 I	単位・時間数	8単位・360時間
担当講師	理学療法学科教員	学 年	3年生 後期
実績経験	資格	総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・訪問・ディサービス・保健所・教育機関などに従事しています。	
	理学療法士		

授業の位置づけ	学内で学んできたことを医療・介護・福祉の実習施設において、症例を担当し、理学療法で取り扱う主な疾患と障害の評価を通して、対象者の抱えている問題点の抽出を実施し、対象者にとって適切となる治療プログラムの作成ができる。 その際、評価項目の抽出法や問題点に対する解釈・統合について、根拠を持って指導者に説明ができる。		
到達目標	医療機関や介護施設内で実習生としての立場を自覚しながら学ぶことができる。 対象者の抱える問題に対し評価項目の抽出ができる。 評価の結果から解釈統合し、問題点に対するゴール、治療プログラムの作成ができる。 1. 実習指導者へ適切な報告・連絡・相談を行い、患者・利用者に対して適切な態度で接することができる。 2. 選択した評価項目を適切な方法で、患者・利用者の状態を管理しながら評価を実施できる。 3. 検査測定の結果と対象者の動作を関連付けて統合解釈し、ゴール設定ができる。 4. 対象者に必要となる治療プログラムの作成ができる 5. 評価結果をわかりやすく指導者や患者・利用者に説明ができる。その際疑問・質問に対し対応できる。 6. 指導者からの指導に対し謙虚に受け取り、修正と改善ができる。		
授業形態	臨床実習		

授業計画

理学療法の評価実習では、評価に関する検査測定の知識、技術を実習指導者の下で、担当症例に対し、一連の評価項目の抽出（カルテからの情報収集、問題点の考察、検査測定からの統合と解釈に基づく問題点の抽出）を通して、臨床問題解決能力と実践能力を実施する。 1. 実習前学習：評価実習で必要な知識・技術の定着を図る。 ① PBL学習において症例に対する問題解決能力を学習する。 ② OSCEによって技術の能力を評価する。 2. 評価実習（全国の医療施設・介護施設で実施する） 1) 患者・利用者に適切な検査測定の選択し評価を実施する。 2) 他部部門から患者・利用者に必要な情報収集を実施する。 3) 評価および情報収集から得られたデータをもとに統合と解釈ができる。 4) 得られたデータを整理・記録し、ゴール設定を実施する。 5) 対象者に必要となる治療プログラムの作成ができる。 （その際、実習指導者へ説明し、アドバイスをもらうことができる） 4. 実習地での報告会や学内発表で自身が経験・体験した内容について報告を行う。 5. 臨床実習Ⅱ（総合臨床実習）に向けて担当教員からフィードバックを受け、次の実習につなげる			
--	--	--	--

成績評価	臨床実習地の総合的評価 実習後の学内発表を総合的評価する。	受講上のルール・留意点	臨床実習地での遅刻・早退・欠席は認めない。 実習指導者に対し、報告・連絡・相談は必ず行う 感染対策に対して、施設の規則に準じて行動する
------	----------------------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
実習地での課題やレポートのフィードバックは実習地で実施する。 実習終了後、担当教員からもフィードバックを実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	臨床実習手引き	学校の資料	
参考書			
オフィスアワー	各実習担当教員・担任		

科目	専門基礎医学演習Ⅱ		単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	外来講師		学 年	4年生 後期
実績経験	資格	長年医療現場で臨床と教育に携わってこられた医師、理学療法士から講義を実施します。		

授業の位置づけ	専門基礎医学演習Ⅱでは、今まで修学した内容を振り返る。 1. 今まで修学した科目を振り返り、知識および技術の習得を目指す。 この授業で習得した学習方法をPBLやOSCEに活用する。		
到達目標	今まで修学した知識と技術を再確認し、習得できる		
授業形態	講義・演習	併用授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回 ～ 15回	基礎医学	解剖学・生理学・運動学
	基礎医学	解剖学・生理学・運動学
	基礎医学	解剖学・生理学・運動学
	基礎医学	解剖学・生理学・運動学
	基礎医学	解剖学・生理学・運動学
	臨床医学	整形外科・中枢神経疾患・精神医学・心理学など
	臨床医学	整形外科・中枢神経疾患・精神医学・心理学など
	臨床医学	整形外科・中枢神経疾患・精神医学・心理学など
	臨床医学	整形外科・中枢神経疾患・精神医学・心理学など
	臨床医学	整形外科・中枢神経疾患・精神医学・心理学など
	理学療法	理学療法の評価と技術
	理学療法	理学療法の評価と技術
	理学療法	理学療法の評価と技術
	理学療法	理学療法の評価と技術
	理学療法	理学療法の評価と技術

成績評価	定期試験：筆記試験100%	受講上のルール・留意点	グループワークがメインとなるため他者に迷惑を かけないことを常に心がけること
------	---------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
レポート課題は、授業中全体に対しフィードバックし、レポートは個別に対応する。

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー	授業時間以外で質問のある場合には、事前にメールで予約をしてください。 Mail：y-uchiyama@nichireha.ac.jp		

科目	理学療法特論Ⅰ		単位・時間数	2単位・60時間
担当講師	PT全教員		学年	4年生 後期
実績経験	資格	実務として総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・訪問・デイサービス・保健所・教育機関		
	理学療法士			

授業の位置づけ	人体を理解し、骨・筋・軟部組織等あらゆることを考慮しながら有効なアプローチを探していかなければならない。その土台となる解剖学の基礎知識を臨床実習が終了したタイミングで再度復習として実施し、基礎知識を定着させるための授業となる。		
到達目標	骨・関節の構造について理解できる 筋の起始・停止について理解できる 内臓の構造について理解できる		
授業形態	演習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回～30回	中枢神経（脳）①	脳の構造
	中枢神経（脳）②	脳の機能
	中枢神経（脊髄）③	錐体路
	中枢神経（脊髄）④	錐体外路
	脳神経①	各神経と核について
	脳神経②	各神経の支配
	末梢神経	各名称と機能
	脳血管	支配領域
	循環器①	循環器の構造
	循環器②	循環器の機能
	内臓諸器官①	各臓器の構造
	内臓諸器官②	各臓器の機能
	神経筋支配	各筋の支配神経
	筋・靱帯	筋の構造と靱帯構造
	発生と組織	各組織について

成績評価	定期試験：筆記試験100%	受講上のルール・留意点	グループワークがメインとなるため他者に迷惑をかけることを常に心がけること
------	---------------	-------------	--------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
全体にフィードバックする

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー			

		理学療法学科	夜 間 部
科 目	理学療法特論Ⅱ	単位・時間数	2単位・60時間
担当講師	PT全教員	学 年	4年生 後期
実績経験	資格	実務として総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・訪問・デイサービス・保健所・教育機関	
	理学療法士		

授業の位置づけ	理学療法士として臨床でリハビリテーションを実施するにあたり、人体生理学を十分に理解することが求められる。人体を理解し、骨・筋・軟部組織等あらゆることを考慮しながら有効なアプローチを探していかなければならない。その土台となる生理学の基礎知識を臨床実習が終了したタイミングで再度復習として実施し、基礎知識を定着させるための授業となる。 1．人体生理学について理解が深められる 2．これらの基礎知識を獲得することで、理学療法における問題発見・解決力や治療アプローチの理解を深める		
到達目標	運動時の生体反応について理解し、リハ施行時のリスク管理について根拠に基づいて説明できる		
授業形態	演習	対面授業	

授業計画		
回数	項目	講義内容
1回 ～ 30回	体温	体温調節について
	基礎代謝	基礎代謝に影響するもの
	エネルギー代謝	運動時のエネルギー代謝
	免疫①	免疫に関わる機能
	免疫②	免疫応答に関する細胞
	呼吸①	呼吸の種類
	呼吸②	呼吸調節
	呼吸③	運動時の努力呼吸
	循環①	心拍出量に影響するもの
	循環②	心拍数、血圧に影響するもの
	循環③	運動時の循環制御
	消化器①	消化酵素の作用
	消化器②	消化酵素の分泌部位
	排尿	排尿のしくみ
	排便	排便のしくみ

成績評価	定期試験：筆記試験100%	受講上のルール・留意点	グループワークがメインとなるため他者に迷惑をかけないことを常に心がけること
------	---------------	-------------	---------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
全体にフィードバックする

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー			

科 目	理学療法特論Ⅲ		単位・時間数	2単位・60時間
担当講師	PT全教員		学 年	4年生 後期
実績経験	資格	実務として総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・訪問・デイサービス・保健所・教育機関		
	理学療法士			

授業の位置づけ	理学療法士として臨床でリハビリテーションを実施するにあたり、身体の構造と機能とがどのように関係しているのかを理解する必要がある。その土台となる運動学の基礎知識を臨床実習が終了したタイミングで再度復習として実施し、基礎知識を定着させるための授業となる。 1. 運動学について理解が深められる 2. これらの基礎知識を獲得することで、理学療法における問題発見・解決力や治療アプローチの理解を深める		
到達目標	運動器の構造を理解し、運動時の機能と結びつけて説明できる		
授業形態	演習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回～30回	機能解剖学①	上肢帯と上肢の運動
	機能解剖学②	下肢帯と下肢の運動
	機能解剖学③	体幹の運動
	機能解剖学④	顔面および頭部の運動
	動作解析①	関節運動
	動作解析②	筋活動 筋収縮の様式
	姿勢①	重心
	姿勢②	姿勢戦略
	歩行①	歩行周期
	歩行②	歩行時の運動学的分析
	歩行③	歩行時のエネルギー代謝
	運動制御①	外的要因
	運動制御②	随意運動
	運動学習①	記憶
	運動学習②	神経回路

成績評価	定期試験：筆記試験100%	受講上のルール・留意点	グループワークがメインとなるため他者に迷惑をかけることを常に心がけること
------	---------------	-------------	--------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
全体にフィードバックする

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー			

		理学療法 学科	夜間部
科 目	理学療法特論Ⅳ	単位・時間数	2単位・60時間
担当講師	PT全教員	学 年	4年生 後期
実績経験	資格	実務として総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・訪問・デイサービス・保健所・教育機関	
	理学療法士		

授業の位置づけ	臨床での理学療法においては、取り扱う疾患は多岐にわたる。臨床医学におけるそれぞれの領域について、臨床実習が終了したタイミングで再度復習として実施し、理学療法における問題発見・解決力や治療アプローチの理解を深める。		
到達目標	それぞれの分野における疾患の特徴を説明できる		
授業形態	演習	対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回 ～ 30回	骨関節障害①	骨・軟骨
	骨関節障害②	脊椎・脊髄
	骨関節障害③	慢性関節疾患
	神経・筋障害①	虚血性脳血管障害
	神経・筋障害②	出血性脳血管障害
	神経・筋障害③	変性疾患
	神経・筋障害④	脱髄性疾患
	神経・筋障害⑤	末梢神経疾患
	内部障害①	循環器疾患
	内部障害②	呼吸器疾患
	内部障害③	消化器疾患
	内部障害④	代謝性疾患
	精神障害①	統合失調症
	精神障害①	神経症性障害
	小児疾患	遺伝学、先天性疾患など

成績評価	定期試験：筆記試験100%	受講上のルール・留意点	グループワークがメインとなるため他者に迷惑をかけることを常に心がけること
------	---------------	-------------	--------------------------------------

課題やレポートに関するフィードバック
全体にフィードバックする

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー			

科 目	臨床実習Ⅱ	単位・時間数	16単位・720時間
担当講師	理学療法学科教員	学 年	4年生
実績経験	資格	実務として、総合病院（急性期・回復期）・クリニック・老健施設・特養・訪問・ディサービス・保健所・教育機関	
	理学療法士		

授業の位置づけ	臨床実習Ⅱは、医療・福祉の施設での検査測定実習と治療実習を通して診療チームの一員として診療に参加し、基本的なリハビリテーション実施能力、理学療法実施能力を修得する。 1. 急性期リハビリテーション、回復期リハビリテーション、地域（老人保健施設、通所施設）リハビリテーション、在宅（訪問）リハビリテーションの実際を経験し、その意義、必要性と役割について修得する。 2. 全人的リハビリテーションを実施する際に必要な知識と技術を修得する。 3. 最後の臨床実習として積極的行動し、専門職として相応しい態度・コミュニケーションで臨むこと。
到達目標	これでの臨床実習（早期見学実習：1年次、見学実習：1・2年次、検査測定実習：2年次、臨床実習Ⅰ：3年次）で積み上げてきたコミュニケーション能力、理学療法検査能力をもとに、指導者の指示のもと基本的理学療法が実施できることを目標とする。 まとめの臨床実習として、評価の検査・測定および患者像に対する評価を適切に実践し、問題点や患者情報から統合・解釈することによって問題点を抽出し、理学療法プログラムの立案および実施を学習する。 ①理学療法士としての礼儀・礼節・接遇が体现でき、基本的なルールを遵守することができる。 ②医療安全についての基本事項を理解し、実践することができる。 ③状況に応じて、必要なタイミングで指導者やスタッフに連絡・報告・相談ができる。 ④基本的な理学療法実践能力： （患者・スタッフ等とのコミュニケーション、医療面接、理学療法、多職種連携）を修得する。 ⑤理学療法で必要なカルテ記載、情報提供書や申し送り書に触れ、実際に体験する。 ⑥診療の現場におけるカンファレンスに参加し、報告できる。 ⑦情報の入手法（論文検索）、適否の判断、診療への応用について、指導者と検証する。 ⑧機会があれば、学会や講習会、講演会等に参加する。

授業形態	臨床実習	
------	------	--

成績評価	臨床実習地の総合的評価 実習後の学内発表を総合的評価する。	受講上のルール・留意点	臨床実習地での遅刻・早退・欠席は認めない。 実習指導者に対し、報告・連絡・相談は必ず行う 感染対策に対して、施設の規則に準じて行動する
------	----------------------------------	-------------	---

課題やレポートに関するフィードバック
実習地での課題やレポートのフィードバックは実習地で実施する。 実習終了後、担当教員からもフィードバックを実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	臨床実習手引き	学校の資料	
参考書			
オフィスアワー	各実習担当教員・担任		